

東京大学総合研究博物館所蔵の三角縁神獣鏡内区片の再発見

雨宮 健祥

要旨

東京大学総合研究博物館に詳細不明の三角縁神獣鏡内区片が所蔵されているらしいということは、1989年の三角縁神獣鏡目録での記載によって知られてはいたものの、内区片の所在と詳細は数十年にわたり不明なままであったが、筆者は2019年に、この内区片「M32」を東京大学総合研究博物館で再発見したのである。

この内区片 M32 は三角縁神獣鏡の 134 鏡という鏡種であり、同じ鏡種である同範鏡はこれまで 7 面が知られている。範傷の発生や拡大、文様の改変などの視点で 7 面の同範鏡と M32 を比較した結果、M32 は自身を含む 8 面の同範鏡の中で 6 番目に製作された鏡であると考えられる。

M32 の再発見に至るまでの来歴については、東京大学総合研究博物館に残されたメモや資料カード、天理大学所蔵の後藤守一の拓本資料などを手掛かりに追跡した結果、M32 は 1926 年以前から東京帝国大学人類学教室に所蔵されており、後藤により万年山古墳出土鏡として認められたが小鏡片故に公表されず、1950 年に「M32」として田辺義一の化学組成分析の対象となった後は田辺が保有し続け、1981 年に東京大学総合研究資料館（現総合研究博物館）に返却されたために 1989 年の目録に内区片の存在のみ記載され、そのまま 2019 年の再発見までの 30 年間所在を忘れ去られていたと考えられる。

後藤の拓本資料に含まれる M32 以外の 3 鏡片も万年山古墳出土三角縁神獣鏡であると考えられ、その内の 1 つが既存の万年山古墳出土鈕片と同一個体であると推察されることから、最終的な万年山古墳出土鏡の面数は浮彫式獣帯鏡 2 面、三角縁神獣鏡 9 面、三角縁神獣鏡？外区片 1 面の計 12 面となった。

1. 発見経緯

東京大学総合研究博物館に、大阪府万年山古墳と群馬県頼母子古墳出土の三角縁神獣鏡以外に、詳細不明の三角縁神獣鏡内区片が所蔵されているらしいということは、既存の三角縁神獣鏡目録の記載によって以前からよく知られていた（京都大学文学部考古学研究室編 1989；下垣 2016 など）。しかしながら、その鏡片が内区片であるという情報以外、出土遺跡や鏡式・文様、現在の所在などはこれまで全くの不明であった。このことを知った当時、筆者は東京大学の学生であったことから、この鏡片について関心を持ってはいたが、手掛かりも無く暗礁に乗り上げたままであった。

そして 2019 年 9 月 12 日、筆者が修士論文執筆のために東京大学総合研究博物館において万年山古墳出土三角縁神獣鏡の実見・撮影をしていた際、この鏡片の存在について職員の方に伺ったところ、心当たりは無いものの万年山古墳関連書類を持ってきていただき、筆者はその内の 1 本の茶封筒の中に、三角縁神獣鏡と考えられる鏡片（図 1）を再発見したのである¹⁾。

詳細は後述するが、封入されていた封筒や鏡面に「M32」と記されていることから（図 1・27）、本論文

ではこの鏡片を「M32」と呼称する。

2. 資料報告

遺存状態・文様構成（図 1） M32 は、鏡背面の遺存状態が全体的に模糊としているために文様を判別しにくいのが、既存の三角縁神獣鏡目録で「内区片」と記載されてきたように、内区文様が 9 割以上を占める鏡片であることは明らかである。M32 の主な文様構成は、突出した乳を中央として、左側に乳向きの獣像、右側に神像が配置される文様構成となっている。神像は M32 の中で特筆して厚い錆に覆われる部分であり、さらに神像下部には人為的な切断面が大きく確認できる。

M32 の鏡面では、神像裏に 2 つのドリル痕と地金らしき金銅色が確認できる一方、獣像裏には「M32」の文字が緑色の錆の上に注記されている。6 章で示す来歴から考えて、金銅色はドリル痕同様、発掘後の研磨で削られて現れたものと考えられ、本来は獣像裏と同様の緑色の錆が全体を覆っていたと考えられる。

法量 横幅が最大 7.5 cm、縦幅が最大 5.0 cm の鏡片で、重量は 44.6 g である。厚さは内区地文部で 1.4～1.9 mm であるが、発掘後の研磨などの影響を考慮すべき

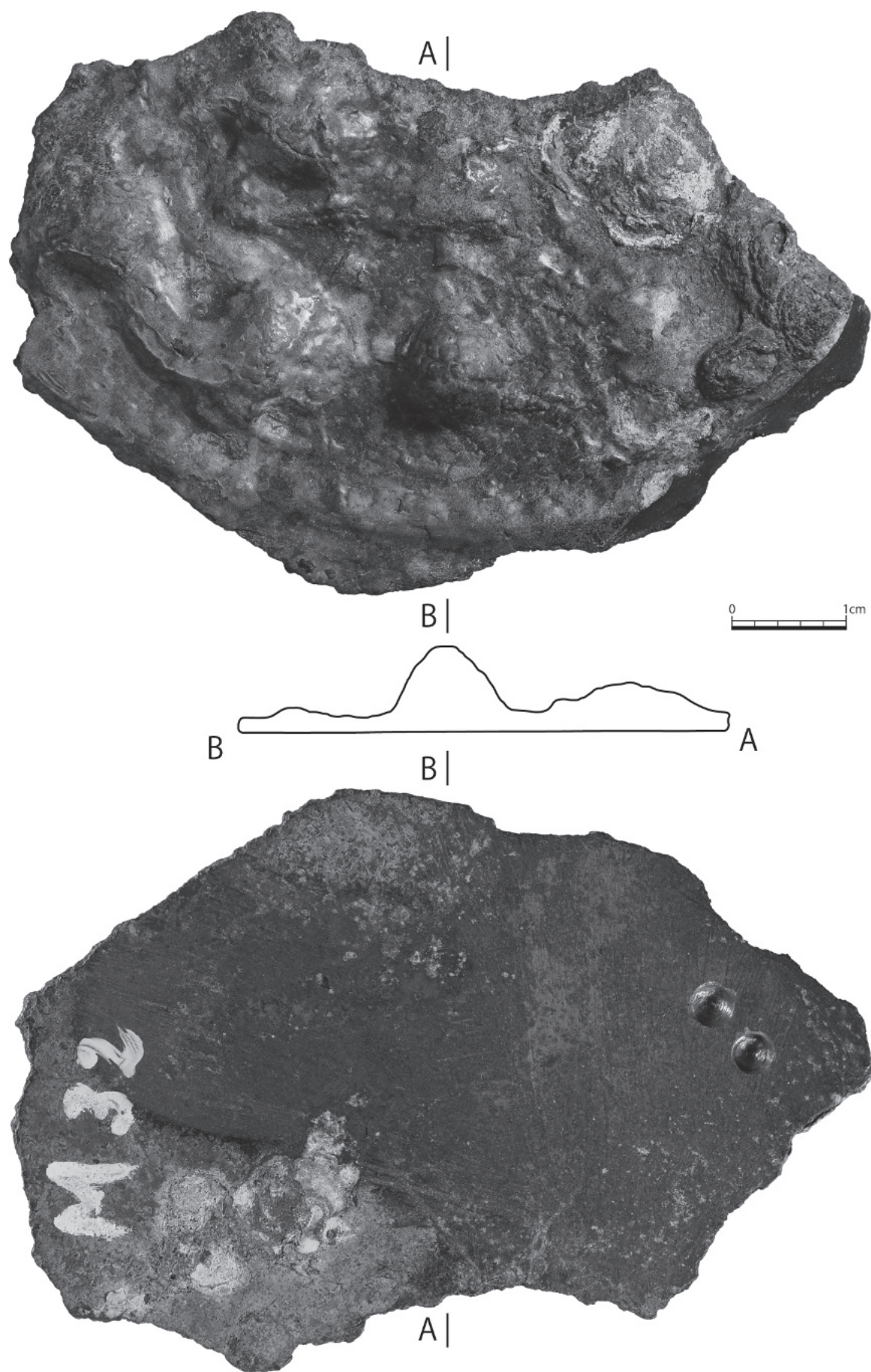


図1 東京大学総合研究博物館所蔵 M32²⁾

であろう。

鈕 M32に鈕は現存しない。獣像と神像の頭部上の断面が鈕座の位置に相当するが、断面や錆の影響で鈕座を確認することはできない。

内区主文部 M32の中央にそびえる乳は径が約10.5 mm、鏡面からの高さが約7.5 mm、鏡胎からの高さが約6 mmの小乳である。乳の周囲には僅かに圈線が見られ、その圈線と乳の間には時計回りに渦を巻く弧線が微かに確認できることから、乳は車輪圈座乳であると言える。

車輪圈座乳の上には太く短い軸と上三角形の膨らみが確認でき、博山炉であると考えられるが、文様は不明瞭である。

乳を向く獣像は口を大きく開けた顔が特徴的だが、口と大きな目以外の相貌は認識できない。体軀は分厚い肩と腰が特徴的で、体軀の大半がM32に残っているものの、細かい文様はほとんど確認できず、僅かに腹部の文様が認識できる程度である。

神像は特に分厚い錆に覆われており、顔と思しき部分は全く相貌が判別できない。肩幅の広い坐像の体部も、右肩にわずかに残る文様の痕跡以外の文様は確認できない。

界圈 獣像の下部から神像の脇にかけて伸びる界圈も文様は模糊としているが、内斜面に外向きの鋸歯文があることが微かに認識できる。界圈の幅は約6 mmで、鏡面からの高さは2.2～2.6 mmである。

内区外周 乳下の界圈の外側に僅かに内区外周が残

存しているが、文様は確認できない。

範傷 M32の鏡背面は細かい凹凸が多く、どれが範傷であるかという判断はM32単体では難しいが、獣像の顔を斜めに切るように走る範傷が図1では最も鮮明に認識できる。この範傷については5章で後述する。

3. M32の鏡種

M32の鏡種の手掛かりとなるのは、三角縁神獣鏡において採用の珍しい車輪圈座乳である。既存の三角縁神獣鏡において内区に車輪圈座乳を持つ鏡種は、管見の限り、目録番号58・82・129・130・131a・132・134鏡³⁾の7鏡種に限られる。M32の乳上の博山炉の存在や獣像の顔の輪郭・大きく開いた口などの点を比較した結果、M32は134鏡の内区の一部に相当すると判明した(図2)。

134鏡は岸本の表現型式では表現⑩(岸本1989)に分類される波文帯三神二獣博山炉鏡であるが、文様の残りが良い佐味田貝吹古墳出土134鏡(図2)を基に、134鏡の主要要素を簡潔に記述する。

鈕 鈕は岩本分類のa式(岩本2008)に分類される半球形で、鈕座は特殊な外向きの鋸歯文座を持つ。

配置 内区は6つの乳で6分割される三神三獣系の配置だが、本来獣像が配置されるべき区画の1つに玄武と大きな博山炉が描かれる特殊なM配置(小林^行1971)をとる。

乳 乳は6つ全てが車輪圈座乳であり、その内3つ

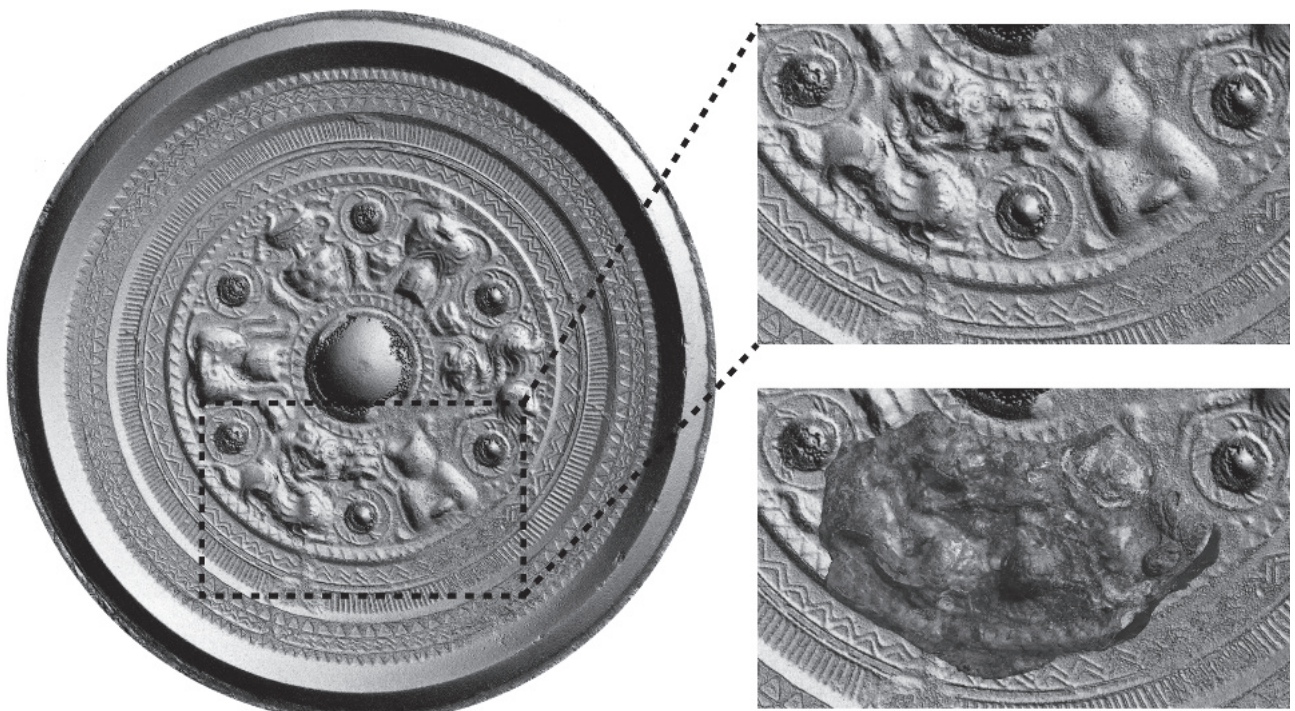


図2 134鏡とM32

は車輪圈の上に博山炉を乗せる。乳と神像の間に博山炉を描くパターンも1つ存在する。

神像 神像3体の内2体は三山冠を被り、残りの1体は双卷冠を被る。顔は横長の楕円で目と口を表現する。神像の肩からは太い雲気を3・4本伸ばし、上半身には半円の縁飾りが付く緩いV字の衿と縦縞上衣が描かれる。中央で合わせた手からは波文状の袂の襷が伸び、神像下の神座から出た雲気が左右の神像脇まで伸びる。

獣像 2体の獣像はどちらも反時計回りに走り、顔を正面に向ける。頭上に明確な角は描かれず、大きな目玉を囲う線が巻き上がり、耳のような表現を成す。大きく開いた口は維綱を銜えておらず、口内の歯牙や舌が明確に描かれる。口端から生える羽毛は上向きに伸び、顎髭も描かれる。体躯は、隆起した肩と腰の間の腹部に3～4本の体毛が描かれ、体毛と共に斑点文様も描かれる。鉤爪状の手は前方へ伸び、線描きの脚が体躯の下にも描かれ、縞模様の尾は上方へ伸びた後に乳に沿うように湾曲する。

玄武・博山炉 134鏡をM配置たらしめている玄武と博山炉は、獣像同様に反時計回りを向く玄武とその甲羅の上の博山炉という構図で描かれる。下部の玄武には明確な蛇表現は見られないが、後方で巻き上がる太い尾や体の周囲でうねる細線表現は蛇の表現と思われるため、玄武と考えてよいであろう。甲羅の上には太い軸に支えられた3段の博山炉が描かれ、その両脇の間隙には下向きの魚が描かれる。

界圈 界圈は内斜面に外向きの鋸歯文が描かれるが、外斜面は無文である。

内区外周 内区外周は内側の波文帯と外側の櫛歯文帯を2本の圈線で区切る2帯構成であり、内区外周斜面は無文である。

外区 外区は外向きの鋸歯文帯2本の間に複線波文帯を描く、三角縁神獣鏡に一般的な3帯構成の外区であり、外周突線は施されない。

以上のような特徴を持つ134鏡は、波文帯鏡群に含まれ、編年においては多くの研究者が舶載鏡段階の最新段階に位置付ける。

4. 134鏡の同範鏡における範傷の再検証

134鏡は同範鏡⁴⁾として、

- ① 岐阜県 円満寺山古墳出土鏡
- ② 奈良県 佐味田宝塚古墳出土鏡
- ③ 伝奈良県 渋谷出土鏡⁵⁾
- ④ 奈良県 佐味田貝吹古墳出土鏡
- ⑤ 岡山県 田邑丸山2号墳出土鏡
- ⑥ 兵庫県 阿保親王塚古墳出土鏡

⑦ 広島県 掛迫第6号古墳出土鏡

の7面が既に知られている(図3)。なお本論文では、この同範鏡7面を各々①円満寺山鏡、②宝塚鏡、③伝渋谷鏡、④貝吹鏡、⑤田邑2号鏡、⑥阿保親王塚鏡、⑦掛迫鏡と呼称する。

これら7面は、②宝塚鏡以外はほぼ欠損の無い完形鏡であり、②宝塚鏡もM32に相当する内区部分が残存しているため、M32は既存の同範鏡の一部が何らかの経緯で東京大学に紛れ込んだものではなく、134鏡の新たな8面目の同範鏡であると言える。執筆時点において三角縁神獣鏡における同範鏡数8面というのは、21鏡の11面、93鏡・207鏡の10面、35鏡・44鏡・213鏡の9面に次ぐ数字であり(岩本2020)、その生産動向は重要な意味を持つであろう。

さて、134鏡の生産動向を考察するためには、M32を含めた134鏡8面におけるM32の立ち位置を考える必要があるが、134鏡の既存の7面については藤丸詔八郎の考察が詳しい(藤丸2005)。

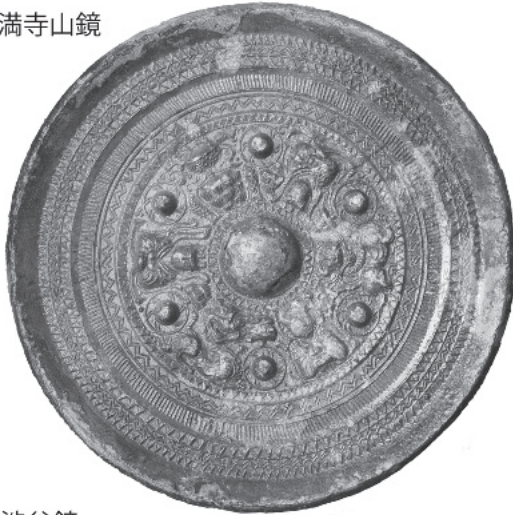
藤丸はまず車輪圈座乳の乳座文様の違い(図4)に着目し、7面をAとBの2グループに大別した。Aグループは2本の弧線が6セット伸びる車輪圈座を持つ①円満寺山鏡・②宝塚鏡・③伝渋谷鏡・④貝吹鏡の4面で、Bグループは弧線が満遍なく全体に描かれる⑤田邑2号鏡・⑥阿保親王塚鏡・⑦掛迫鏡の3面である。三角縁神獣鏡の車輪圈座としてはAグループの形態が一般的であり、藤丸はその他の要素を含めて考察した結果、Bグループの乳座文様がAグループの乳座文様を改変したものとする。

そして藤丸はこの2グループに対して、各グループ内での範傷の増加と拡大や鏽漬れの程度を観察し、表1の通りに鑄造順を推測した⁶⁾。具体的には、Aグループ内では7個の範傷を基に、①円満寺山鏡・②宝塚鏡→③伝渋谷鏡→④貝吹鏡の鑄造順を推定し、Bグループでは11個の範傷を基に、⑤田邑2号鏡→⑥阿保親王塚鏡→⑦掛迫鏡の鑄造順を推定し、踏襲・進行・増加する範傷の状況から、134鏡7面を同範技術による製作と想定したのである。

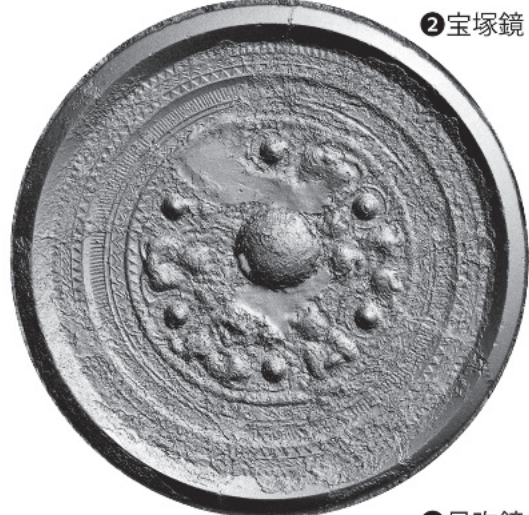
この藤丸の分析にM32を当てはめてみると、まずM32の乳座文様については、文様の凹凸が見えづらいうものの弧線が間隔なく全体に描かれていることが確認できるため(図5)、M32はBグループに相当すると言えよう。

次に範傷についてだが、藤丸の指摘するa～lの12個の範傷は図6の通りの場所に存在し、M32に相当する内区部分に近い範傷は範傷fのみであるが、範傷fは基本的には界圈と内区外周から外区に及ぶ範傷であると藤丸は定義しており、Bグループ内における範

①円満寺山鏡



②宝塚鏡



③伝渋谷鏡



④貝吹鏡



⑤田邑2号鏡



⑥阿保親王塚鏡



⑦掛迫鏡

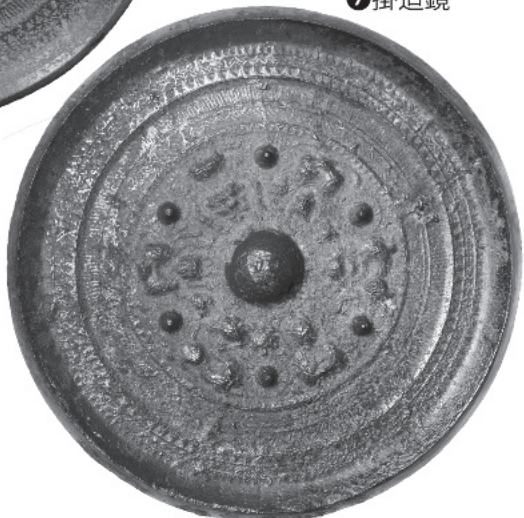


図3 134鏡同范鏡7面

表1 134鏡のA・Bグループにおける主な範傷の様相と鑄造順について（藤丸2005）（筆者一部修正）⁷⁾

範傷の種類	グループ名	Aグループ				Bグループ			範傷の位置
	鑄造順	→	→	→	→	→	→	→	
	鏡名	円満寺山鏡	佐味田宝塚鏡	伝天理市鏡	佐味田貝吹鏡	田邑丸山鏡	阿保親王塚鏡	掛迫鏡	
塊状の傷	a	○	○	○	○	×	×	×	三山冠双翼像付近の櫛歯文上
	b	○	?	○	+○	++○	++○	+++○	三山冠単翼像の向かって右下
	c	○	?	○	○	○	○	○	双髻冠像の向かって右斜め下
	d	○	?	+○	++○	+++○	+++○	++++○	長髯獣形の前足付近
	e	○	?	+○	+○	+○	+○	+○	範傷bの右下付近の櫛歯文带上
	f	○	?	+○	++○	+++○	+++○	++++○	短髯獣形の前足付近
	g	×	×	×	○	?	?	?	短髯獣形の後足付近
	h	×	×	×	×	○	○	○	三山冠単翼像寄りの外区文様部
	i	×	×	×	×	×	○	○	三山冠単翼像の神座付近
	j	×	×	×	×	×	○	○	範傷c付近の外区文様
	k	×	×	×	×	×	×	○	三山冠双翼像の右膝付近
筋状の傷	l	×	×	×	×	○	○	+○	博山炉形の龜形付近
鑄潰れの有無		×	×	○	+○	×	?	?	双髻冠像とその付近の界圍、波文帯、櫛歯文帯

（○×は範傷の有無を、また、+が多いほど傷が拡大している状況を示す）

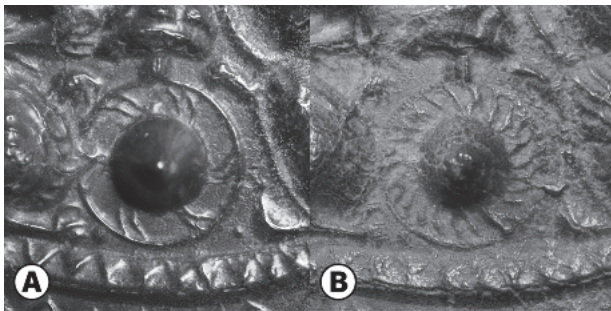


図4 車輪圈座乳2種

傷fの変化も外区においてであると指摘していることから、藤丸の示す範傷とその傾向では、ほぼ内区のみで構成されるM32を他の同範鏡と比較することは難しい。

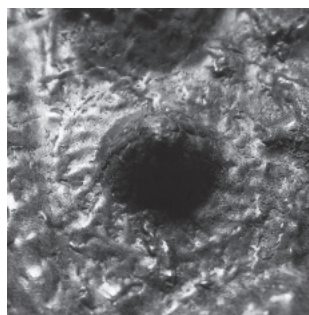


図5 M32の車輪圈座乳

そこで、まずは藤丸の示した134鏡の既存の同範鏡7面における範傷とその変化の妥当性⁸⁾について、筆者が資料調査を行った成果⁹⁾などから改めて検証し、その上でM32の立ち位置について検証したい。

範傷a（図7） 範傷aは内区外周の櫛歯文帯に存在する小さな塊状の範傷であり、表1の通り、Aグループでは変化がなくBグループになると消える範傷とみなされ、AグループとBグループの差異の一つとして

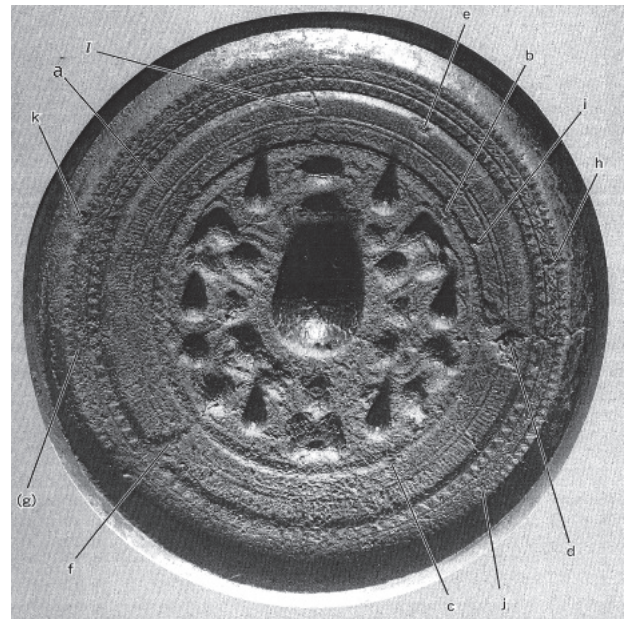


図6 藤丸指摘の範傷の位置（筆者一部加筆）

藤丸は重視している。実見したところ、確かにAグループの4面で継続して存在し、大きさの変化も無いが、Bグループで存在しないわけではない。⑤田邑2号鏡では該当箇所に塊状ではなく突起状の範傷があり、⑥阿保親王塚鏡でも櫛歯文の間に鏡胎の小さな浮き上がりが確認できる。これは塊状であった範傷が潰れて横に広がり、鏡背面全体が模糊となる中で視認しづらくなったものと考えられる。なお、⑦掛迫鏡は該当部分が錆と範傷の区別が付かないほど錆に覆われて

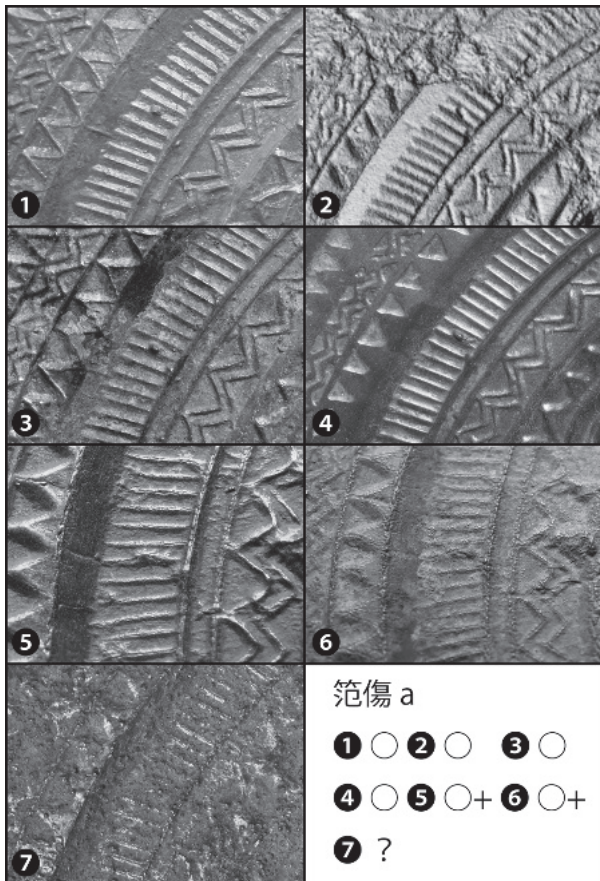


図7 範傷aの様相

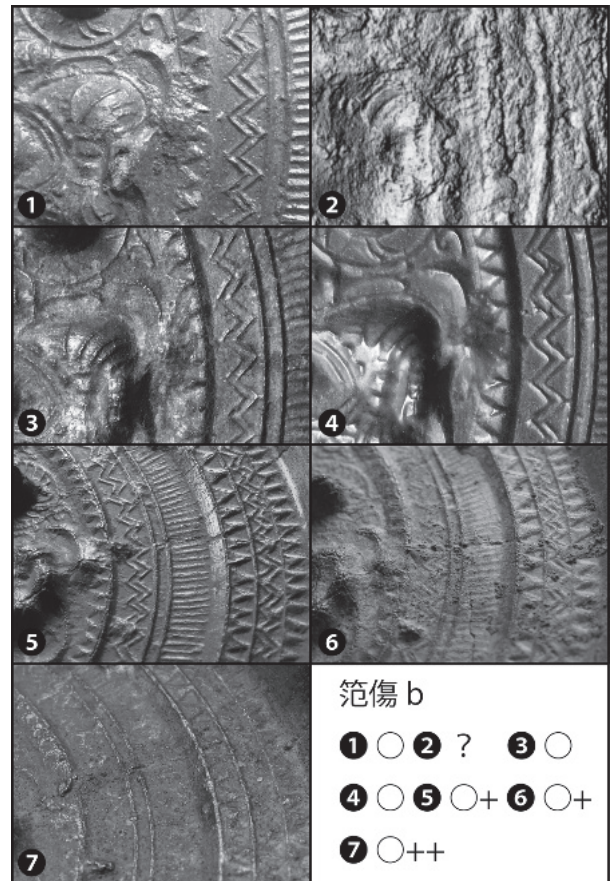


図8 範傷bの様相

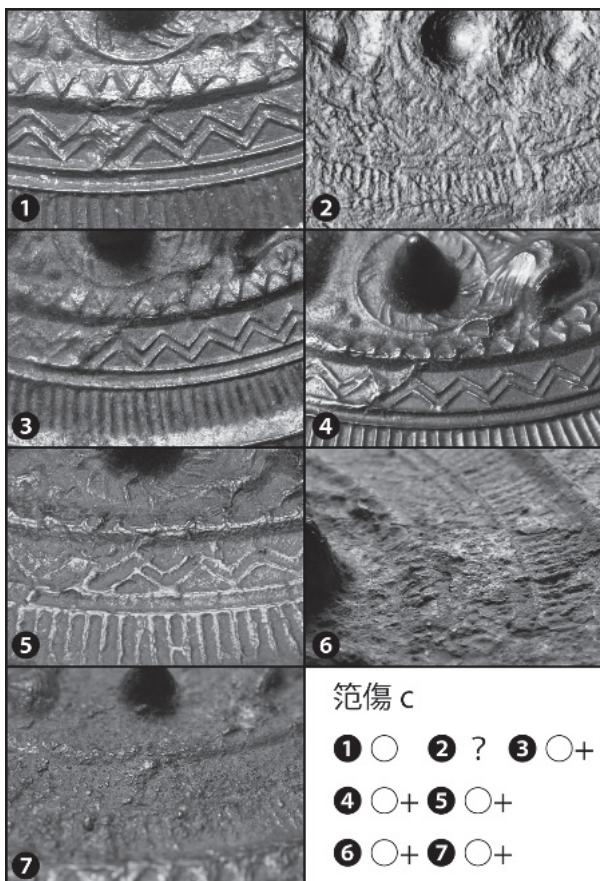


図9 範傷cの様相

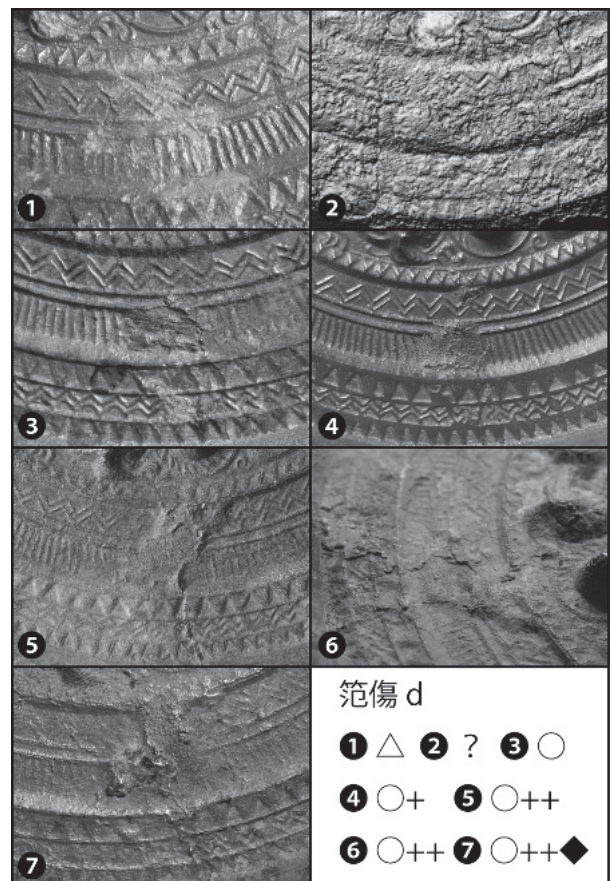


図10 範傷dの様相

おり、状態は不明である。

範傷 b (図 8) 範傷 b は主に神像の神座・雲気と界圏に跨る山型の範傷であり、B グループでは内区外周にまで広がるとされる。A グループ内では表 1 の通り、④貝吹鏡でのみ拡大すると藤丸は指摘するが、実見したところ、A グループ内においては山型の範傷の範囲に変化はなく、波文帯側へ範傷が拡大する萌芽が④貝吹鏡の界圏外斜面で僅かに見られる程度である。B グループでは範傷の範囲が波文帯まで拡大しつつ、具体的な場所の明示は無いものの⑦掛迫鏡でのみさらに範傷が拡大すると藤丸は指摘するが、実見したところ、B グループでは藤丸の指摘通りに界圏を越えて波文帯まで範傷の範囲が拡大しつつ、⑦掛迫鏡では界圏上の範傷の範囲および厚みが明確に拡大している。また、範傷 b は波文帯に留まらず外区まで筋状に伸びており、⑦掛迫鏡では三角縁の立ち上がり際の外区で塊状の範傷を作るまで拡大している。

範傷 c (図 9) 範傷 c は波文帯上にある小さな範傷であり、表 1 の通り、A・B グループ内で変化は無いとされてきた。実見したところ、確かに①円満寺山鏡では波文帯内に留まっているものの、③伝洪谷鏡と④貝吹鏡では界圏を斜めに切る筋状の範傷として拡大しており、獸像の脚まで伸びている。B グループの 3 面においては、鋳肌や錆の影響により範傷の様相を鮮明に確認することはできないが、④貝吹鏡から大きく拡大している様子はない。

範傷 d (図 10) 範傷 d は表 1 の通り、同範鏡内で段々と拡大していく範傷とされ、範囲は櫛歯文帯内から始まって最終的には界圏の外斜面と三角縁の内斜面まで広がるとされてきた。①円満寺山鏡の櫛歯文帯に範傷の萌芽となる鋳潰れがあると藤丸は指摘するが、実見したところ、該当部分が鏡の接合面を含む影響で判断しにくいものの、僅かに櫛歯文の線が薄い一帯が確かに存在する。③伝洪谷鏡では範傷がほぼ櫛歯文帯内に留まっており、外区では僅かに範傷が確認できる程度である。④貝吹鏡では櫛歯文帯での範囲は③伝洪谷鏡から変わらないものの、波文帯と界圏外斜面を跨ぐ範傷が新たに発生しており、さらにそのまま筋状の範傷が獸像の手から体軀前面、そして顔を縦断しながら最終的には鈕座まで到達している（図 21）。なお、④貝吹鏡は外区が研磨されているために範傷 d の外区での範囲を明確に認識できるが、③伝洪谷鏡では錆に覆われている場所であり、③伝洪谷鏡から外区で範傷の範囲が拡大したかは不明である。B グループの⑤田邑 2 号鏡では波文帯において範傷の範囲が横に大きく拡大しており、外区でも塊状の範傷が明確に確認できる。⑥阿保親王塚鏡では⑤田邑 2 号鏡から範傷の様相

は変わらず、⑦掛迫鏡では範囲はほぼ同じであるが、範傷の厚みが大きく増している。

範傷 e (図 11) 範傷 e は櫛歯文帯と内区外周斜面に跨る範傷であるが、表 1 の通り、①円満寺山鏡のみ小さく、拡大した後の③伝洪谷鏡から⑦掛迫鏡の間ではほぼ範囲が変化しないとされてきた。実見したところ、確かに範傷 e は①円満寺山鏡でのみ内区外周斜面上の小さな範傷であり、③伝洪谷鏡以降は拡大した範傷の範囲を変化させない。ただし、③伝洪谷鏡以降の 6 面の中で唯一、④貝吹鏡では範傷が薄くなっている。

範傷 f (図 12) 範傷 f は内区外周の櫛歯文帯を中心に界圏の外斜面から外区まで広がる範傷で、表 1 の通り、同範鏡内で段々と拡大していく範傷とされてきた。実見したところ、①円満寺山鏡では櫛歯文帯で文様が乱れつつも辛うじて櫛歯文は残っており、波文帯から界圏を越えて筋状の範傷が内区まで伸び始め、外区の複線波文帯上でも範傷が僅かに確認できる。③伝洪谷鏡では範傷の範囲は①円満寺山鏡と変わらないものの櫛歯文帯がえぐれて文様が見えなくなっている。④貝吹鏡では櫛歯文帯と外区での範囲に変化は無いが、波文帯から界圏の外斜面にかけて範傷の範囲が③伝洪谷鏡より拡大している。⑤田邑 2 号鏡では波文帯で範傷の範囲が④貝吹鏡からさらに拡大しており、⑥阿保親王塚鏡では内区外周に錆が多く、⑦掛迫鏡も鋳肌の荒れにより判断しにくいものの、どちらも内区外周の範傷に⑤田邑 2 号鏡からの大きな変化は認められない。ただし、⑥阿保親王塚鏡と⑦掛迫鏡では外区の外側鋸歯文帯上に新たな範傷が発生している。なお、範傷 f の内区での様相は 5 章で後述する。

範傷 g (図 13) 範傷 g は外区の複線波文帯内に見られる小さな範傷であり、表 1 の通り、A グループ内では④貝吹鏡のみに存在する範傷とされてきた。しかしながら、実見したところ①円満寺山鏡と③伝洪谷鏡の複線波文帯の同じ場所でも小さな傷を確認することができた。④貝吹鏡は外区が研磨されているために範傷の範囲が明確でより広いように見えるが、①円満寺山鏡・③伝洪谷鏡の外区を研磨すればほぼ同じ見た目になると推察され、範傷の変化は無いと考えたい。B グループ 3 面では、模糊とした鏡背面の影響でこの小さな範傷 g の様相をほとんど認識できないが、⑤田邑丸山 2 号鏡で僅かに確認できる範傷 g と見られる様相や、周囲に新たな大きな範傷が見られないことから、大きな拡大は無いと思われる。

範傷 h (図 14) 範傷 h も外区に見られる小さな範傷であり、表 1 の通り、A グループ内に存在せず、B グループで新たに発生する範傷とされてきた。しかしな

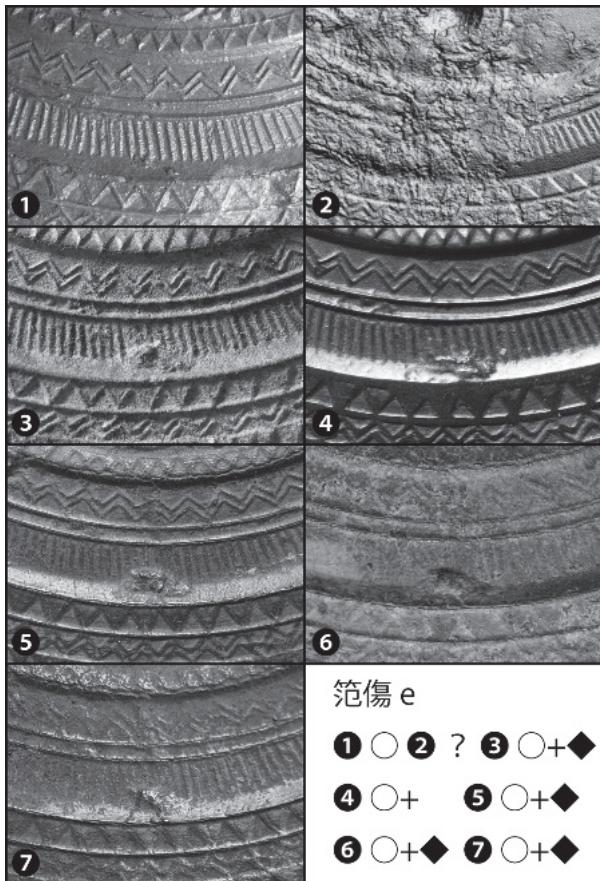


図11 範傷eの様相

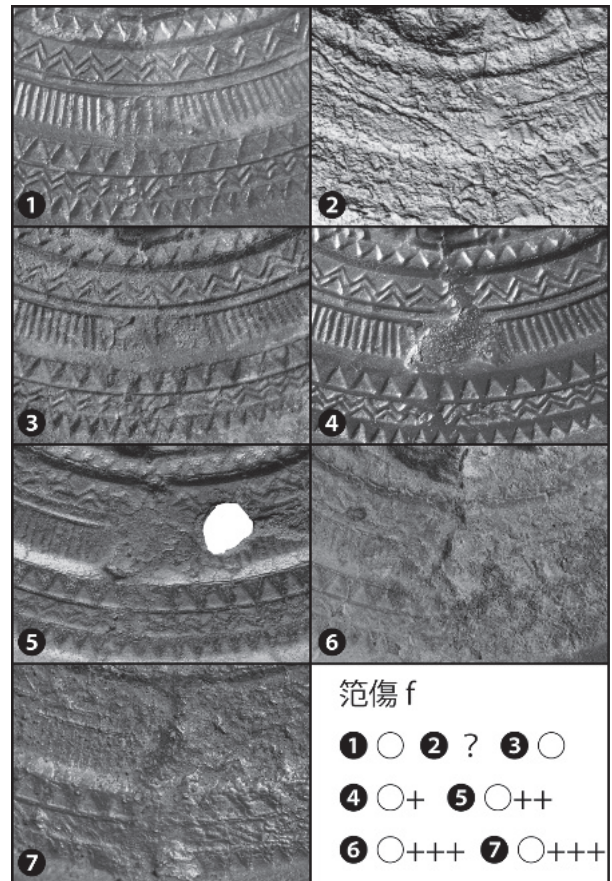


図12 範傷fの様相

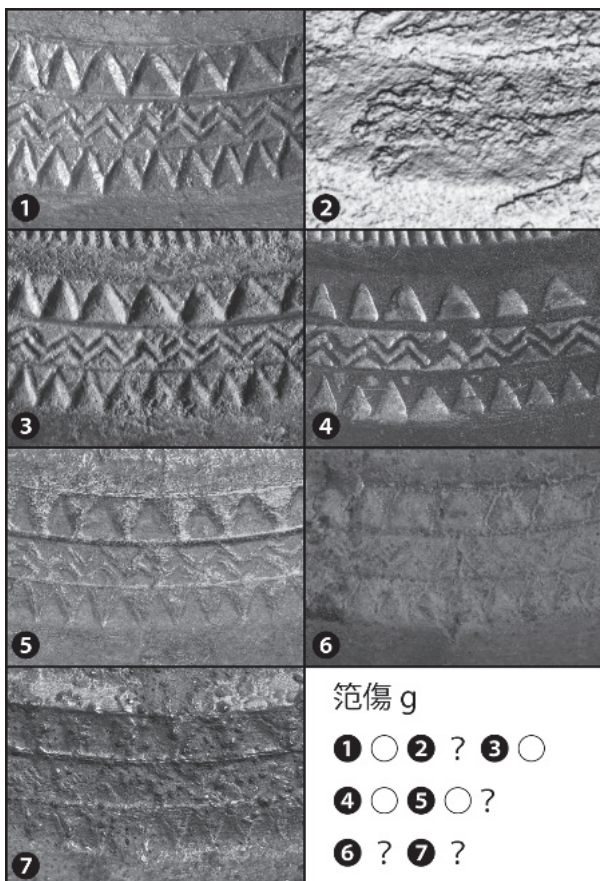


図13 範傷gの様相

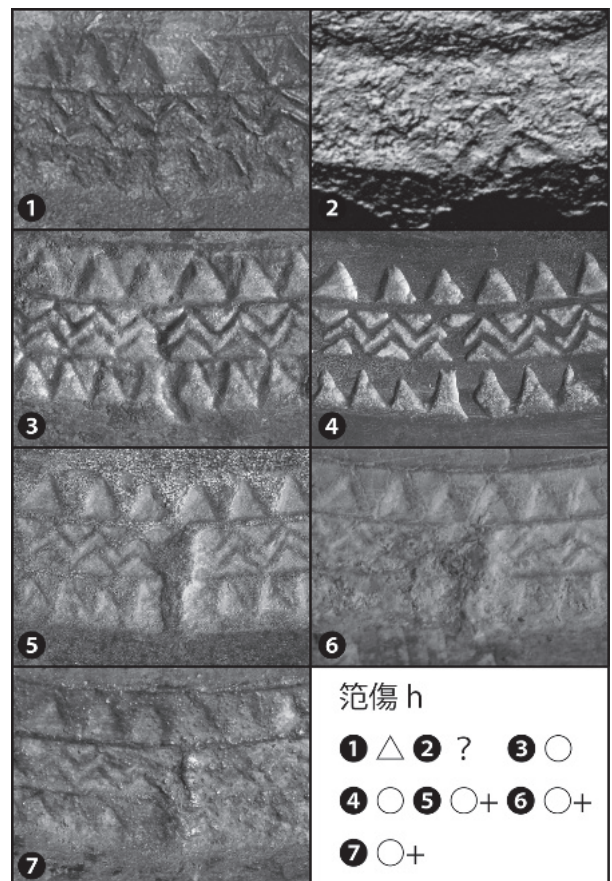


図14 範傷hの様相

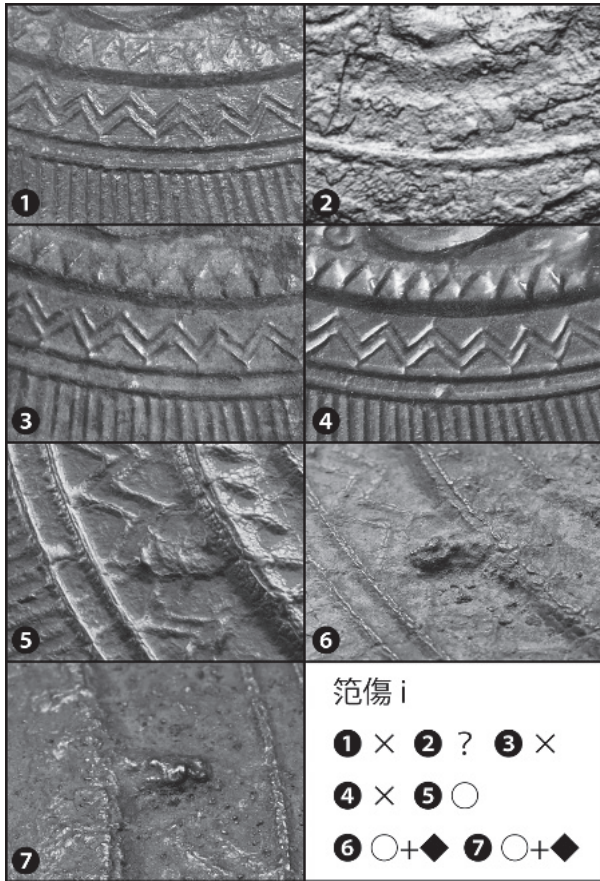


図15 範傷iの様相

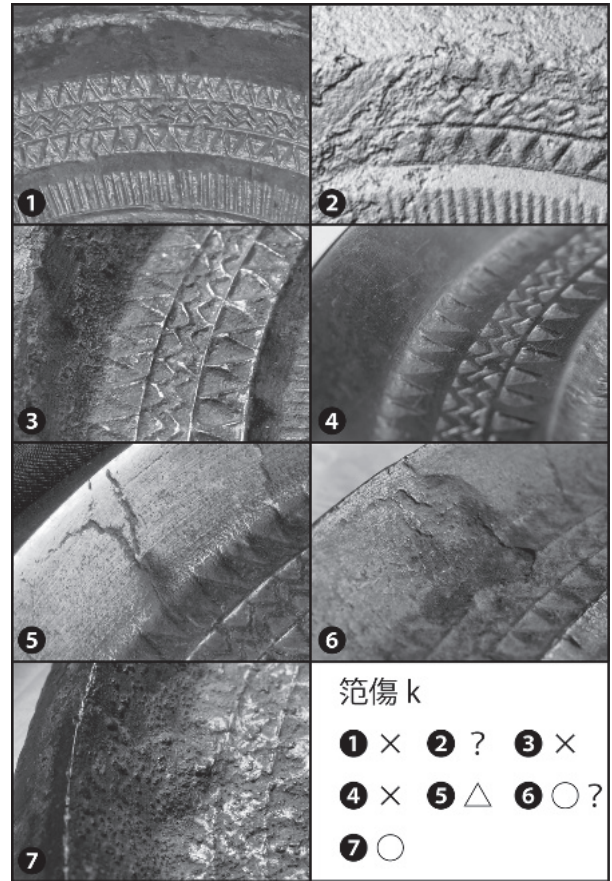


図16 範傷kの様相

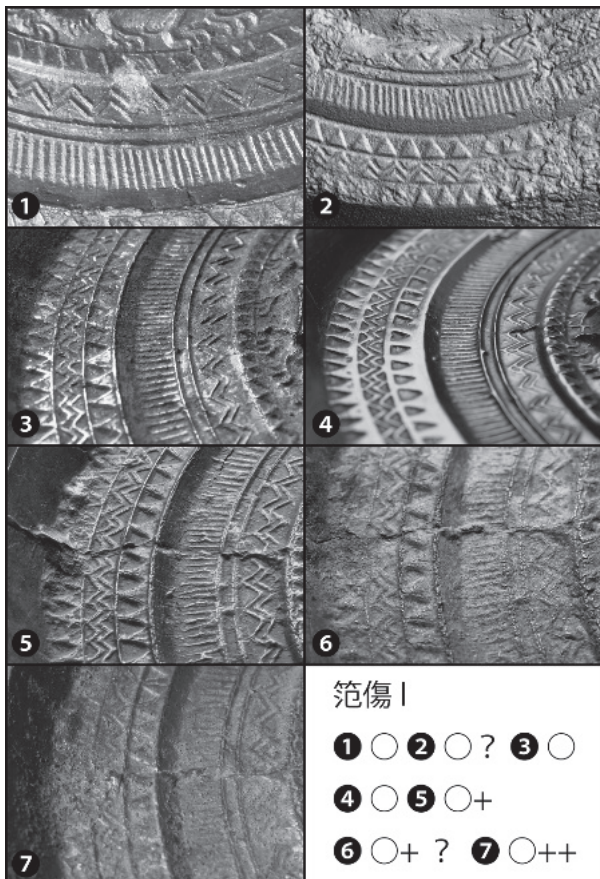


図17 範傷lの様相

から、実見したところ A グループの③伝洪谷鏡と④貝吹鏡でも範傷 h を確認することができた。この2面の範傷 h は主に外区の外側鋸歯文から三角縁の内斜面へ伸びる横棒状の範傷であり、複線波文帯にも僅かに侵食している。そして B グループでの範傷 h は③伝洪谷鏡と④貝吹鏡の範傷よりも範傷の幅が大きくなり、複線波文帯においても範囲が拡大しているが、B グループの3面の間での変化は見られない。

範傷 i (図15) 範傷 i は波文帯から界圏の外斜面上にかけて存在する範傷であり、表1の通り、A グループの鏡には存在せず、B グループ内でも⑤田邑2号鏡には存在しない範傷とされてきた。実見したところ、確かに A グループの鏡には範傷 i が存在せず、B グループの⑥阿保親王塚鏡と⑦掛迫鏡では、波文帯上で厚く盛り上がる塊状の範傷 i が界圏の外斜面上まで伸びる様子がほぼ同じ大きさで確認できる。一方、⑤田邑2号鏡では範傷 i が存在しないわけではなく、波文線上の小さな範傷と界圏外斜面上へ伸びる萌芽と見られる鏡胎のゆらぎが確認できるが、外斜面上には到達していない。

範傷 j 範傷 j は外区文様上にある小さい塊状の範傷であるとされ、表1の通り、A グループの鏡には存在せず、B グループ内でも⑤田邑2号鏡には存在しない

範傷とされてきたが、藤丸論文に掲載の図版5（藤丸2005：19）（図6）と図版7（藤丸2005：20）で指し示す範傷jの場所が異なるため、そもそもどの範傷を範傷jと藤丸が考えていたのかが不明である。また、図版5・7で示された場所はどちらも、⑥阿保親王塚鏡では鋳肌の荒れと範傷の区別がつかず、⑦掛迫鏡では周囲に膜状の錆があるために範傷なのか錆かを判断できないため、今回は範傷jを分析対象外とする。

範傷k（図16） 範傷kは外区の外側鋸歯文帯上に存在する塊状の範傷であり、表1の通り、⑦掛迫鏡にのみ存在するとされてきた。実見したところ、確かに⑦掛迫鏡では外側鋸歯文帯から三角縁内斜面にかけて錆に覆われた塊状の範傷が存在するが、⑥阿保親王塚鏡では同じ場所に大きな凹みが存在し、凹みの範囲は⑦掛迫鏡の範傷kの範囲とほぼ同一である。一方、⑤田邑2号鏡でも三角縁内斜面に亀裂や凹みが見られるが、⑥阿保親王塚鏡の三角縁内斜面の凹みよりも小さく、外区の外側鋸歯文帯上には範傷および凹みは見られない。⑤田邑2号鏡の亀裂は範傷kの萌芽段階であり、⑥阿保親王塚鏡には範傷kが本来存在したと筆者は考えているが、詳細は後述する。

範傷l（図17） 範傷lは藤丸が指摘した唯一の筋状の範傷であり、玄武下の波文帯から外区まで伸びるとされる。表1の通り、範傷lはAグループには存在せず、Bグループでは全ての同範鏡で存在するものの⑦掛迫鏡でのみやや進行しているとされてきた。しかしながら、実見したところAグループの①円満寺山鏡・③伝洪谷鏡・④貝吹鏡3面の界圏外斜面から波文帯にかけて、Bグループの範傷lへと成長する前の小さな範傷lを波文帯の線に沿って確認することができた。②宝塚鏡の三次元計測画像ではこの小さな範傷lが存

在するか判断できないが、Bグループのような外区に伸びる範傷lが存在しないことは確認できるため、①円満寺山鏡や③伝洪谷鏡と同じ様相であったと推測される。外区まで筋状に伸びるBグループでは、外区の複線波文帯上における範傷の増加が⑤田邑2号鏡と⑦掛迫鏡との間で確認できるものの、⑥阿保親王塚鏡では該当部分が欠損しているため、どちらに近いか判断が難しい。外側鋸歯文帯上のその他の範傷の様相については後述する。

さて、藤丸の指摘する範傷a～lについて以上の通り再検証してみたが、結果としては表2の通りとなる。この表2を基に既存の同範鏡7面の製作順序を改めて考察すると、Aグループの①円満寺山鏡・③伝洪谷鏡・④貝吹鏡3面については範傷dの様相から順序は明らかであり、櫛歯文が残る①円満寺山鏡→櫛歯文帯内で範傷dがほぼ収まる③伝洪谷鏡→波文帯と界圏外斜面まで範傷dが広がる④貝吹鏡という、藤丸の表1の鋳造順と同様の結果が導かれた。なお範傷eにおいて、④貝吹鏡の範傷が③伝洪谷鏡の範傷よりも薄いため、順序が逆ではないかという指摘も想定されるが、範傷の厚みは鋳造時の湯流れ・鋳造後の研磨・使用による摩耗・埋葬時の腐食・錆による変化などにより変化する不完全な指標であり、筆者は不可逆な指標である範傷の発生や範囲拡大を基に製作順序の考察を行うため、今回は範傷dや範傷fの範囲変化に基づき、Aグループ内では④貝吹鏡が最も新しいとする。

そしてBグループの⑤田邑2号鏡・⑥阿保親王塚鏡・⑦掛迫鏡3面の製作順序については、範傷bの界圏内斜面における範囲拡大から見て⑦掛迫鏡が3面の内で最も新しいと考えられ、範傷iの拡大から見て⑤田邑2号鏡が3面の内で最も古いと考えられることか

表2 134鏡の既存の同範鏡7面における藤丸指摘の範傷の様相の再検証

	Aグループ				Bグループ		
	①円満寺山鏡	②宝塚鏡	③伝洪谷鏡	④貝吹鏡	⑤田邑2号鏡	⑥阿保親王塚鏡	⑦掛迫鏡
a	○	○	○	○	○+	○+	?
b	○	?	○	○	○+	○+	○++
c	○	?	○+	○+	○+	○+	○+
d	△	?	○	○+	○++	○++	○++◆
e	○	?	○+◆	○+	○+◆	○+◆	○+◆
f	○	?	○	○+	○++	○+++	○+++
g	○	?	○	○	○?	?	?
h	△	?	○	○	○+	○+	○+
i	×	?	×	×	○	○+◆	○+◆
j	-	-	-	-	-	-	-
k	×	?	×	×	△	○?	○
l	○	○?	○	○	○+	○+?	○++

○×：範傷の有無 △：範傷の萌芽 +：範傷の範囲拡大 ◆：範傷の厚み増大 ?：不明 -：対象外

ら、結果として⑤田邑2号鏡→⑥阿保親王塚鏡→⑦掛迫鏡という、藤丸の表1と変わらない順序をAグループと同様に導くこととなった。

このBグループの順序については、範傷kの特殊な様相によっても追認することができる。前述したように、⑥阿保親王塚鏡では⑦掛迫鏡の範傷kの範囲とほぼ同じ範囲の凹みが存在するが（図16）、凹みの縁の鋭利さから見て、この凹みは範傷kの剥離によるものと考えられる。つまり、⑥阿保親王塚鏡にも⑦掛迫鏡と同等の塊状の範傷kが通常であれば発生するはずであったが、周囲の三角縁内斜面の表面を巻き込みながら剥離してしまったと考えられる。その一方で、⑤田邑2号鏡では外区の外側鋸歯文帯上に範傷が見られないことから、範傷の無い⑤田邑2号鏡のみ古いことが導かれる。なお、⑤田邑2号鏡の三角縁内斜面の亀裂は⑥阿保親王塚鏡の剥離面および⑦掛迫鏡の三角縁内斜面でも継続して確認できることから、範傷kの発生原因はこの亀裂によるものであろうか。

この範傷の剥離という現象は、Bグループ3面の鏡背面で多く散見される現象である。範傷fにおいて⑥阿保親王塚鏡と⑦掛迫鏡の外区の外側鋸歯文帯上に範傷が発生していることは前述したが、⑦掛迫鏡の外区の厚い範傷は中央の一部が剥離したような形状をしている（図18）。⑤田邑2号鏡の該当箇所には僅かな範傷と三角縁内斜面の亀裂しかない一方、鋳の影響で正確な範囲は分からないものの⑥阿保親王塚鏡には⑦掛迫鏡の範傷に通ずる塊状の範傷と複線波文帯まで広がる剥離らしき凹みと三角縁内斜面表面の剥離が発生しており（図18）、⑤田邑2号鏡の製作順序が古いことを裏付けている。

さらにこの⑤田邑2号鏡では、範傷lが伸びた先の外区の外側鋸歯文帯上に塊状の範傷が発生しつつ、周囲の鋸歯文帯上にも低めの範傷がまばらに広がっている点が注目されるが（図17）、⑥阿保親王塚鏡と⑦掛迫鏡の該当箇所には、周囲の低めの範傷は残りつつも塊状の範傷が存在せず、塊状の範傷の該当箇所を内包する範囲の文様が消えている。これは⑥田邑2号鏡と⑦掛迫鏡において塊状の範傷が剥離した結果であることが推測される。

範傷の剥離については、発生箇所が三角縁の立ち上がり際という特殊な箇所がほとんどであるため、鋳造時の構造上の問題であると考えられるが、製作順の新しいBグループで多発していることから、複数回の鋳造を繰り返した鏡範の疲労が原因という可能性もある。ただし、範傷dやfにおいて、内区外周に広がる範傷の縁が剥離らしき鋭利な形状をしているものが複数あるなど（図10・12）、三角縁の立ち上がり際以外

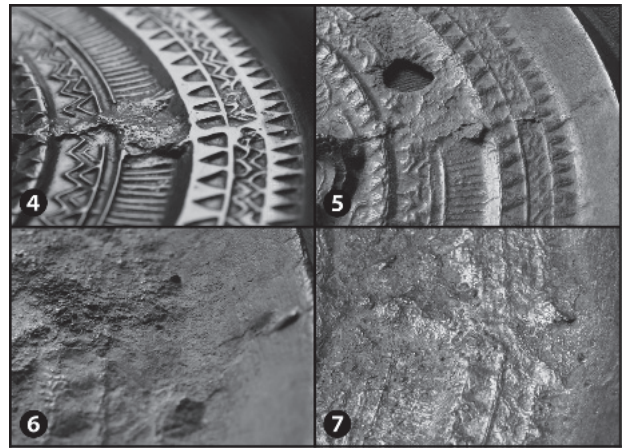


図18 外区における範傷fの様相

でも範傷の剥離が発生している可能性はある。

さて、同範鏡の製作順序の考察に立ち返ると、残りの②宝塚鏡については、図3の通り、鏡背面が多くの付着物で覆われているためにほとんどの範傷を確認できない。表2にある通り、比較可能なのは範傷aと範傷1程度であり、この2つだけではAグループ内での製作順序を判断することはできない。そこで藤丸が注目したのが、M32にも含まれる双卷冠神像の鋳潰れである（藤丸2005）（図19）。この双卷冠神像は、文様が比較的鮮明な③伝洪谷鏡・④貝吹鏡にあってひと際文様が不鮮明な箇所であり、周囲の鋳肌の状態から見ても湯流れの悪さが際立つ部分である。その一方で、①円満寺山鏡と②宝塚鏡では神像の衣の襷が確認できるなど文様が鮮明なままである。

藤丸はこの不鮮明な双卷冠神像の位置が③伝洪谷鏡と④貝吹鏡の鈕孔方向と一致していることなどから、③伝洪谷鏡の「鋳造にあたって鋳型の湯口付近に何らかのトラブルが発生」（藤丸2005：5）したものとして推測する。③伝洪谷鏡以降では、岩本も指摘するように（岩本2024）鈕の形態が高くなるように改変されており（図20）、また①円満寺山鏡の鈕孔方向が③伝洪谷鏡・④貝吹鏡・⑤田邑2号鏡の鈕孔方向と僅かに角度が異なる（図3）¹⁰ ことから、①円満寺山鏡と③伝洪谷鏡の間で鋳型に関する差異が存在することは明らかであり、同時に生じた双卷冠神像の不鮮明さがこの差異を原因とすると考えれば、②宝塚鏡は鈕の形態と双卷冠神像の遺存状態が似る①円満寺山鏡と非常に近い関係にあるといえるだろう。

なお、この双卷冠神像については、⑤田邑2号鏡において体部の文様がグループAの神像の文様から改変されていることが確認できる（図19）。文様の改変が最も明確なのは神像の右肩であり、①円満寺山鏡の神像の右肩には2条の緩いV字の衿とその外側に3つ連なる半円の縁飾り、そしてその下の縦縞上衣とい

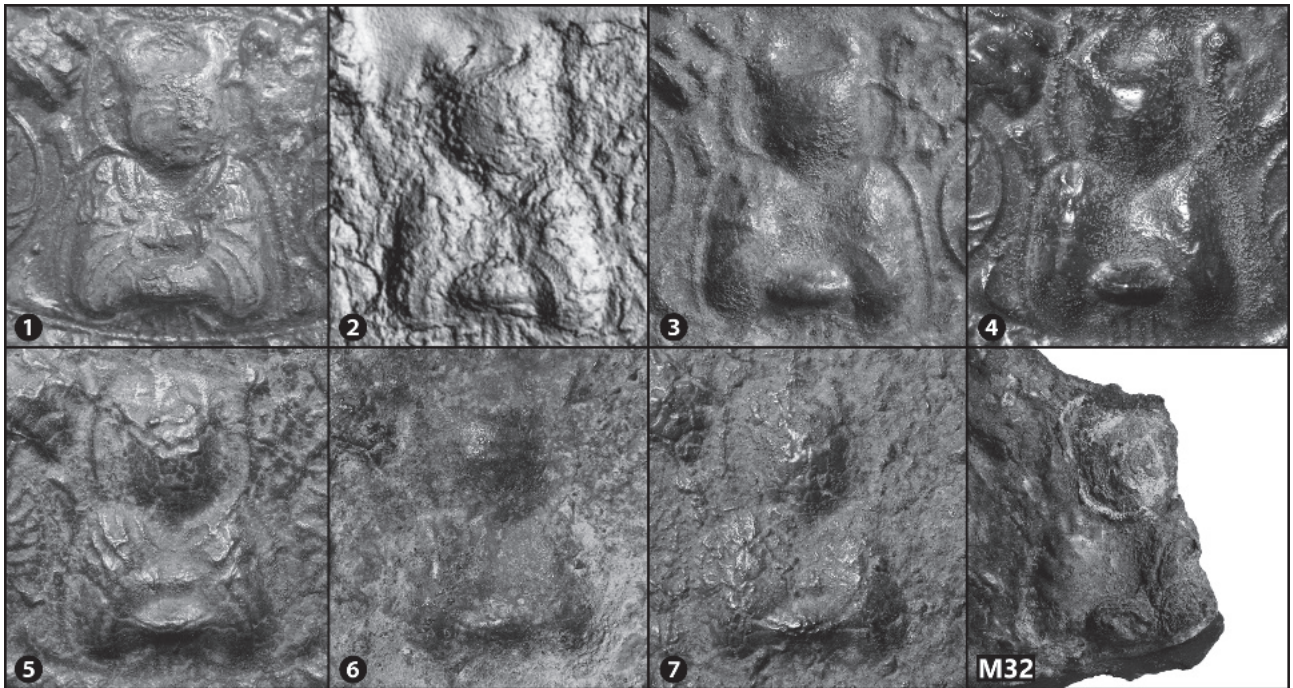


図19 134鏡の双卷冠神像8種

う陳氏系の神像に特徴的な体部文様が確認できるが、**⑤**田邑2号鏡の神像右肩では縦縞上衣は確認できず、2条の衿の外には縁飾りではなく衿に沿った弧線が2本引かれている。

この文様の改変が起こった時期については、**③**伝渋谷鏡において縁飾りと縦縞上衣らしき凹凸が右肩で確認できること、**④**貝吹鏡で僅かに縁飾りらしき半円の凹凸が右肩で確認できること（図19）、文様の改変という同じ現象が車輪圈座において**④**貝吹鏡と**⑤**田邑2号鏡の間で起こっていることを踏まえると、車輪圈座の改変同様、**④**貝吹鏡と**⑤**田邑2号鏡の間で起こった、AグループとBグループを区別する文様改変であると考えられる。

そもそもこの双卷冠神像の文様改変は、鏡背面全体の錆上がりや湯周りの悪い**⑤**田邑2号鏡でも双卷冠神像の文様がある程度認識できるが故に判明したが、前述した通り、より製作順序が古く鏡背面の状態も良い**③**伝渋谷鏡・**④**貝吹鏡ではこの双卷冠神像の文様をほとんど認識することができない（図19）。

⑤田邑2号鏡になって再び双卷冠神像の文様が鮮明になるこの現象について藤丸は、**④**貝吹鏡鑄造後に鑄型が壊れたために神像の文様が鮮明なAグループの鏡を踏み返して二次范を作り、同時に乳座文様の改変も行った可能性と、范は変わらずに乳座の改変と湯口のトラブルの補修が行われた可能性の2つを示しているが（藤丸 2005）、双卷冠神像周囲の湯周りの悪さは**⑤**田邑2号鏡で全く無くなったわけではない。**⑤**田邑2号鏡でも双卷冠神像方向の内外区全体の錆肌は広く

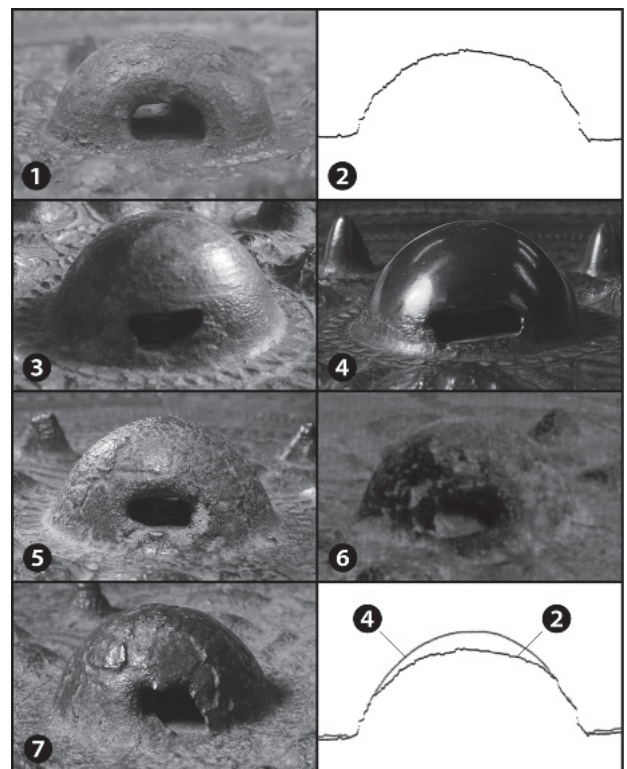


図20 134鏡の鈕の形態

荒れており（図3）、その範囲は**③**伝渋谷鏡・**④**貝吹鏡における神像周囲の錆潰れの範囲よりも拡大していることから、**⑤**田邑2号鏡では錆潰れ全体の範囲が広がったことにより双卷冠神像での程度が薄まったことで、文様がある程度認識できるようになったと解釈できる。

⑤田邑2号鏡よりもさらに鏡背面の状態が悪い**⑥**阿

保親王塚鏡と⑦掛迫鏡では、双卷冠神像の体部文様をほとんど認識することができないが(図19)、これが③伝渋谷鏡や④貝吹鏡と同様に鏡背面の中で双卷冠神像のみが特筆して不鮮明であるために文様が認識できないのか、⑤田邑2号鏡と同様に鋳潰れの程度は薄まったものの鏡背面全体の状態の悪さから文様を認識できないのかは判断が難しい。しかしながら、③伝渋谷鏡や④貝吹鏡では確認できない手の凹凸や右肩の衿文様が僅かに⑦掛迫鏡の双卷冠神像で確認できることや、双卷冠神像と他の内区文様との間で遺存状態の差が小さいことから、⑥阿保親王塚鏡と⑦掛迫鏡の双卷冠神像は鏡背面の中で特筆して不鮮明なのではなく、⑤田邑2号鏡と同様に鋳潰れの程度は収まっていると考えられる。つまり、⑤田邑2号鏡において再び双卷冠神像の文様が鮮明となる現象はBグループで継続していることになる。

よって④貝吹鏡と⑤田邑2号鏡の間、つまりAグループとBグループの間では、車輪圈座と神像体部の文様改変が行われただけではなく、③伝渋谷鏡や④貝吹鏡で見られる湯口・鋳型に起因すると考えられる局所的な鋳潰れが範囲を拡大させており、恐らくこの鋳造上の変化がBグループ全体に共通する鏡背面全体の鋳上がりや湯流れの悪さにも繋がっていると考えられる。

このAグループとBグループの差を単なる時間的な、枚数的な差にとらえることも可能だが、文様を改変するという画期や文様改変後の文様がどちらも三角縁神獸鏡に一般的な文様ではないことから、時間的かつ工人的な差ではないかと筆者は考えているが、今後の課題としよう。

以上、多くの紙面を割いて134鏡の同範鏡に対する藤丸の考察を改めて検証してみたが、範傷の有無や変化などについて異論は多くあったものの、結果としては①円満寺山鏡→②宝塚鏡→③伝渋谷鏡→④貝吹鏡→⑤田邑2号鏡→⑥阿保親王塚鏡→⑦掛迫鏡という藤丸の製作順序を追認する形となった。

5. M32の位置づけ

さて、以上の134鏡の既存の同範鏡7面の生産動向をもとに、本題のM32の位置づけについて考えてみよう。

4章でも触れたように、M32は車輪圈座乳の乳座文様が改変された後の鏡であることからBグループに相当するため、問題となるのは⑤田邑2号鏡・⑥阿保親王塚鏡・⑦掛迫鏡3面との前後関係である。しかしながら、この3面の製作順序を裏付けることができる範傷bや範傷i、範傷kなどはM32に相当する内区とは

離れた場所にあり、唯一近い場所にある範傷fも前述した範傷の増加は外区で起こっていることから、M32とBグループ3面をこれまでの範傷の視点では比較することができない。

唯一M32に近い範傷fについて、筆者はこれまで藤丸の定義通りに、櫛歯文帯から外区を中心に記載し、M32に相当する内区側については界圈を越えるのみの言及に留めていたが、実見したところ、範傷fは内区側で筋状の範傷として広範囲に広がっていた。内区文様の残りが良い④貝吹鏡で範傷の様相を確認してみると、範傷fは界圈を越えた先の獸像の前脚から体軀の前面にかけて直線的に縦断し、もう一方の前脚の手の甲の部分で角度を変え、獸像の顔を口角から鼻・眉毛と斜めに切るように横断し、最終的には鈕座まで到達している(図21)。顔を横断するこの範傷fは③伝渋谷鏡でも確認でき、①円満寺山鏡では萌芽らしき細線が僅かに走る。また前述した通り、同様の現象が範傷dと別の獸像でも確認できる。

M32で左側に位置する獸像でこの範傷fの様相を確認すると、模糊とした表面のために認識しづらい部分も多いが、顔や体軀前面を走る範傷fの凹凸を僅かではあるが認識できる(図1)。そしてその中で最も特徴



図21 ④貝吹鏡の内区における範傷f・範傷dの様相

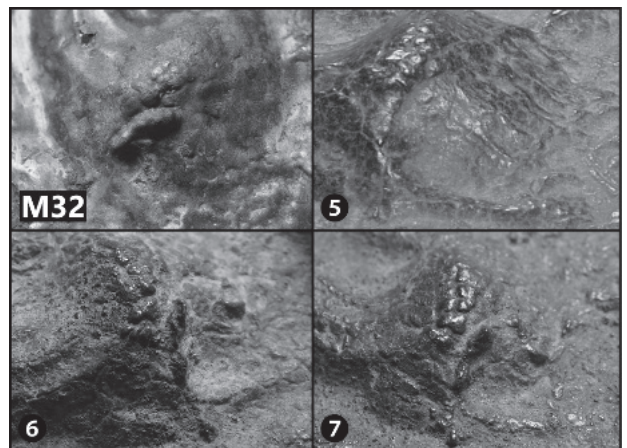


図22 Bグループの獸像における範傷f・範傷mの様相

的なのが、④貝吹鏡では確認できない、体軀前面を縦断する範傷fが肩の頂部付近において深い傷となり外側に捲れている様相である（図22）。Bグループの他の3面においてこの部分の様相を確認すると、⑥阿保親王塚鏡と⑦掛迫鏡では同様の捲れが確認できるが、⑤田邑2号鏡では範傷が深い傷になってはいないものの外側が捲れていない。⑤田邑2号鏡については該当箇所表面の状態から見て、捲れた部分が剥離した結果である可能性もあるが、この範傷fの捲れからは、M32が⑤田邑2号鏡よりも製作順序が新しい鏡であると考えることができる。

この捲れた範傷fの周囲を観察すると、製作順序の手掛かりとなるもう1つの範傷（以下範傷mとする）を確認することができる。範傷mは獣像の体軀の最前面に位置する短い線状の範傷であり、⑦掛迫鏡において鮮明に確認できる（図22）。範傷mの位置は、④貝吹鏡で確認すると体軀前面の体毛表現が存在する場所であり（図21）、この体毛表現と範傷mの形状は非常に似ているものの、その他の体毛表現が同じように隆起した様相を呈していないことから考えて、体毛表現が発生の遠因となっている可能性はあるが、文様ではなく範傷と認定してよいだろう。

範傷mはBグループの⑦掛迫鏡では明確に存在し、⑥阿保親王塚鏡でも湯流れが悪い箇所にも関わらず明確に存在している。一方で、⑤田邑2号鏡では体毛表現の名残が見えるばかりで範傷mは確認できず、M32においても範傷mは確認できない。よって範傷mからは、M32は⑥阿保親王塚鏡と⑦掛迫鏡よりも製作

順序が古い鏡であると考えられることができる。

次にM32の中央に鎮座する車輪圈座乳とその上の博山炉について観察すると、4つの範傷に気づくことができる。1つ目は④貝吹鏡でも確認できる博山炉の上部を横に走る範傷nである（図23）。範傷nは獣像の左目の目頭から博山炉の上部を横断して神像の頭部脇まで伸びる範傷であり、範傷fと獣像の鼻の交差部分から分岐した範傷である可能性が高い。範傷nは断面の影響もありM32ではあまり鮮明に確認できないが、Aグループの④貝吹鏡とBグループの既存3面の中で最も新しい⑦掛迫鏡において存在を確認できるため、M32を含むBグループでは普遍的範傷であると考えられ、製作順序の根拠にはなりえない。

2つ目も同じ博山炉の中央にある、四角い凹みとその右下の小さな突起がセットとなった範傷oである

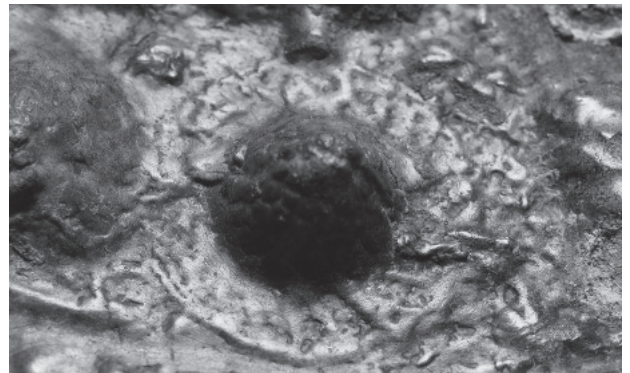


図24 M32における範傷p（左）・範傷q（右）の様相

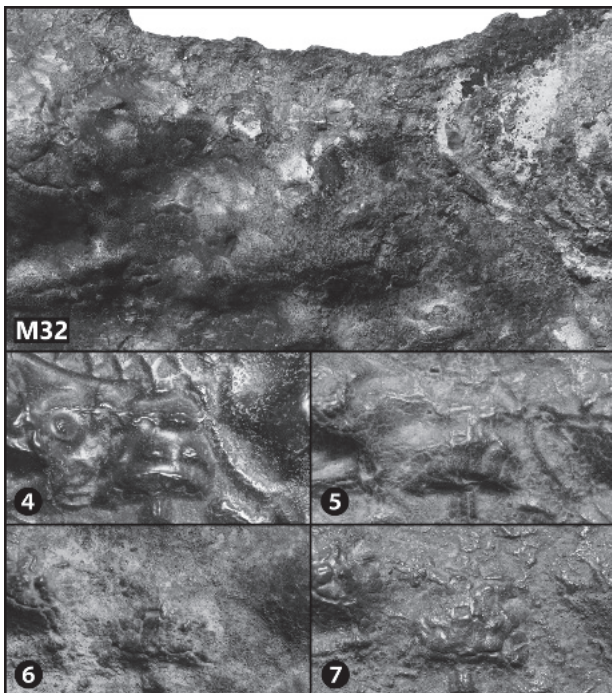


図23 博山炉における範傷n・範傷oの様相

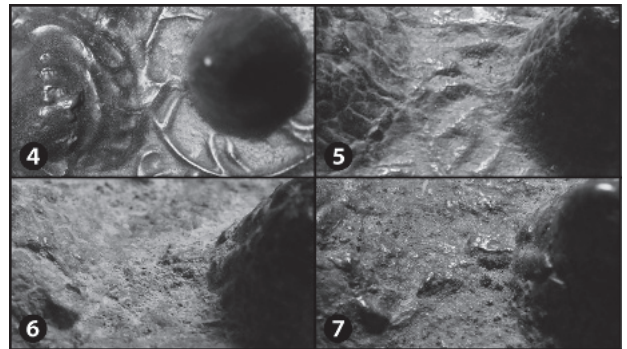


図25 車輪圈座乳における範傷pの様相

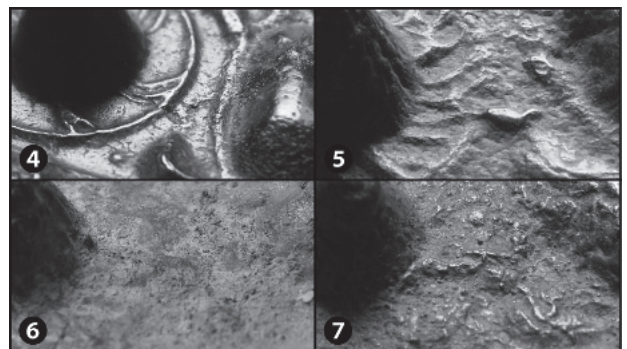


図26 車輪圈座乳における範傷qの様相

(図23)。範傷oは④貝吹鏡では確認できない、Bグループに特有な範傷であるが、⑤田邑2号鏡・⑥阿保親王塚鏡・⑦掛迫鏡・M32 全てで確認できるため、こちらも製作順序の根拠とはなりえない。

最後の3・4つ目は車輪圈座乳の左右に存在する範傷p(左)と範傷q(右)である(図24)。M32の乳の左側に位置する範傷pは乳座の中央で上下に分かれる範傷であり、乳側では太く短く、獸像側では三角形の様相を呈するが、この範傷pの成立過程の手掛かりが①円満寺山鏡・③伝渋谷鏡・④貝吹鏡に共通して存在する。④貝吹鏡の該当箇所には、時計回りに廻る弧線と交差する形で細長い筋状の範傷が1本走っており(図25)、交差点の左側にできた三角形が範傷pの獸像側の萌芽となり、右側にできた短い二重線が範傷pの乳側の萌芽となったのであろう。

Bグループにおける範傷pについては、⑦掛迫鏡では乳側・獸像側共に明確に存在し、⑥阿保親王塚鏡では乳側が僅かに確認できるものの獸像側は確認できず、⑤田邑2号鏡では乳側が少し盛り上がっているものの車輪圈の弧線の域を出ていない(図25)。なお、⑥阿保親王塚鏡については車輪圈座乳周辺が特に湯流れの悪い箇所では凹凸がほとんど無いことから、獸像側が通常でも存在しないとは言いきれない。

乳の右側の範傷qも段状の範傷であるが、M32の乳から伸びる細長い範傷が乳座の圈線付近で段状に分岐し、塊状の範傷を挟んで下の神像脇の雲気と繋がっている(図24)。この範傷qも萌芽と思しき範傷が③伝渋谷鏡と④貝吹鏡に存在しており、時計回りに廻る

2対の弧線の下に細い1本の範傷が走りつつ、圈線と雲気の間には萌芽と思しき鏡胎の揺らぎが確認できる(図26)。

Bグループにおける範傷qについては、範傷pと同様に⑦掛迫鏡では明確に存在するも、⑥阿保親王塚鏡では湯流れの悪さに起因して僅かに痕跡らしき段差の変色が見られる程度であり、⑤田邑2号鏡では雲気に繋がる塊状の範傷が確認できるものの、M32に見られるような段状の範傷は確認できない(図26)。

以上、博山炉と車輪圈座乳の領域においては、車輪圈座乳の左右に存在する範傷pと範傷qの様相から見て、M32は⑤田邑2号鏡よりも製作順序が新しい鏡であると考えることができる。

さて最後に、M32の右側の双卷冠神像について観察してみると、M32の双卷冠神像は顔と体部右側から下部にかけて分厚い錆に覆われており、衿や手の文様が描かれるべき体部中央も凹凸が無く、分析対象となりえるのは、文様の凹凸が僅かに確認できる体部左側(右肩)のみである(図19)。しかしながら、その右肩についても文様を判断できるレベルの凹凸ではなく、範傷なども確認できないため、双卷冠神像からはM32の製作順序を導くことはできない。

以上、M32について獸像・博山炉・車輪圈座乳・神像と各部位ごとに観察と分析を行ったが、獸像の体軀前面で捲れる範傷fと車輪圈座乳の左右にある範傷pと範傷qの様相からは、M32は⑤田邑2号鏡よりも製作順序が新しく、⑥阿保親王塚鏡と⑦掛迫鏡に近い同範鏡であると考えられ、その一方で、獸像の体軀

表3 134鏡の同範鏡8面の生産動向

	Aグループ				Bグループ			
	A-1グループ		A-2グループ					
	①円満寺山鏡	②宝塚鏡	③伝渋谷鏡	④貝吹鏡	⑤田邑2号鏡	M32	⑥阿保親王塚鏡	⑦掛迫鏡
製作順序	1 or 2		3	4	5	6	7	8
車輪圈	2本6セット				全体満遍無く			
神像文様	2条の衿+縁飾り+縦縞上衣				2条の衿+2本の弧線			
神像状態	鮮明		不鮮明		A-2グループよりは鮮明(鏡背面全体の錆上がり悪し)			
鈕形態	平坦							
範傷b	○	?	○	○	○+	?	○+	○++
範傷d	△	?	○	○+	○++	?	○++	○++◆
範傷f(内区以外)	○	?	○	○+	○++	?	○++++	○++++
範傷i	×	?	×	×	○	?	○+◆	○+◆
範傷k	×	?	×	×	△	?	○?	○
範傷f(内区)	△?	?	○	○	○+	○++	○++	○++
範傷m	×	?	×	×	×	×	○	○
範傷p	△	?	△	△	△?	○	○?	○
範傷q	×	?	△	△	○	○+	○+?	○+

○×：範傷の有無 △：範傷の萌芽 +：範傷の範囲拡大 ◆：範傷の厚み拡大 ?：不明

最前面に位置する範傷 m の様相からは、M32 は⑥阿保親王塚鏡と⑦掛迫鏡よりも製作順序が古く、⑤田邑2号鏡に近い同範鏡であると考えられる。

結果として M32 は、⑤田邑2号鏡と⑥阿保親王塚鏡の間に製作された6番目の同範鏡であると考えることができ、134 鏡の同範鏡8面の生産動向は表3として纏められる。

6. M32の戦後の来歴

ここまでは M32 を他の三角縁神獣鏡と比較することで、M32 の三角縁神獣鏡における相対的な意義を考察してきたが、本章以降からは、M32 自体を深く掘り下げることで、M32 自体の絶対的な意義を考察することとし、第一段階としてまずは、M32 の来歴を辿ることとする。

1 章でも触れたように、M32 が封入されていた封筒には文字が書かれており、その文言は「M32 万年山 番外3」「田辺 M32」であり、同じく東京大学総合研究博物館に出土鏡が所蔵されている万年山古墳との関連性が強く窺われる(図27)。なお、図1に見られる通り、鏡面にも M32 と書かれていることから、「M32」はこの鏡片自体を指していると考えてよいだろう。

さらに、封筒が含まれていた万年山古墳関連書類の中には M32 の封筒の他にも、「M29 万年山 番外1」と書かれたポリ袋の中に、中国鏡と思しき小鏡片が4片、「M29」と書かれた濾紙に包まれて確認された(図27)。4 鏡片は一部が欠損しているものの、1つの鏡片に復元することができ、断面の状態や鏡面のドリル痕の位置から見て、元々1つの鏡片であったものが発掘後のドリルの衝撃によって割れたものと想定される(図28)。本論文ではこの小鏡片群を M29 と呼称するが、M32 と同様の番号であり、ポリ袋に同じく万年山の文字もあることから、これら2つの鏡片は密接な関係にあることが窺われる。

さて、M32 や M29 について考察する前に、封筒やポリ袋に記載のある万年山古墳とその出土鏡について簡単に説明する必要があるだろう。

万年山古墳が初めて学会に紹介されたのは梅原末治による報告である(梅

原 1916)。梅原によると、万年山古墳は河内国北河内郡枚方町大字枚方三矢共有地 424 番、現在の大阪府枚方市枚方上之町にかつて存在し、1904(明治 37) 年 1 月 22 日に小学校の運動場作りのための地均し工事中に、偶然木棺や鏡・大刀などが発見されたことにより古墳として確認された。破壊に伴う発見後十数年が経って初めて梅原によって報告が行われたこともあり、1916 年段階で既に古墳は破壊され、当時の調査書類も存在していなかったが、遺物に関しては鏡が東京帝国大学人類学教室に、木棺は京都大学に所蔵され、書類や現地の方の証言から出土したと考えられる大刀や玉類は所在不明であった。梅原は万年山古墳からの出土鏡として獣帯鏡2面と三角縁神獣鏡5面(2鏡・35鏡・58鏡・76鏡・111鏡)の計7面を挙げた

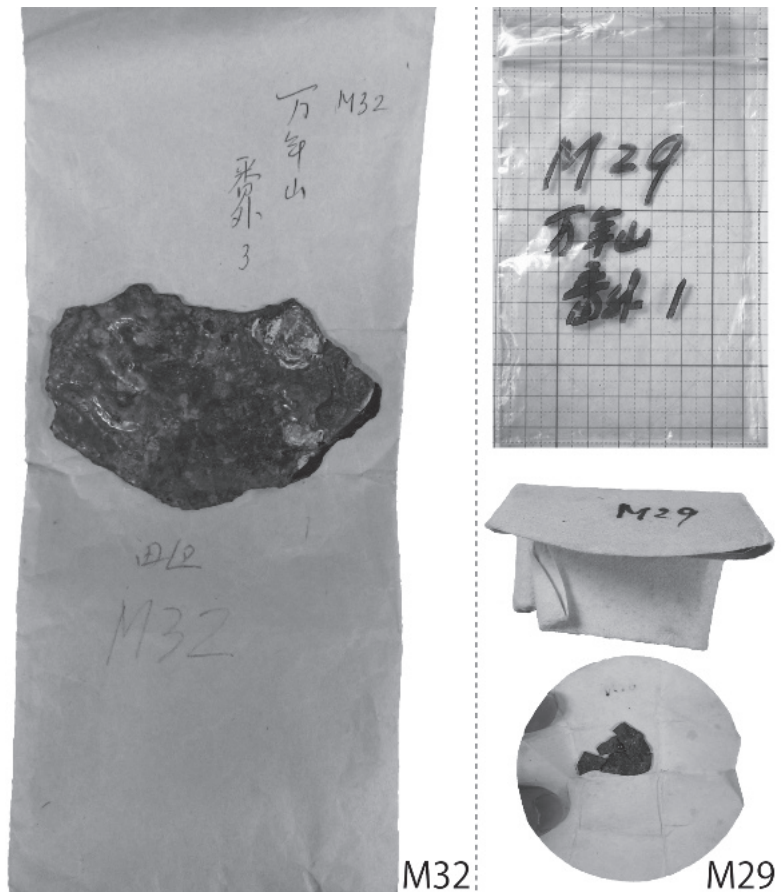


図27 M32・M29の発見状況



図28 M29の復元

APPENDIX

LIST OF THE MATERIALS OFFERED TO CHEMICAL ANALYSES

Article,	Number	Period	Type	Source	Reference
Mirror					
	M 1	Mid Yayoi	Han dynasty type (重圈葉文)	Suku, Fukuoka, Kyūshū	UMEHARA (1930)
	M 2	"	" (重圈清白)	"	"
	M 3	"	" (星雲)	"	"
	M 20	"	"	Osaka, Kinki	
	M 21	Early Tumuli	Wei dynasty type (Shinjū-kyo)	Mannenyama, Ōsaka, Kinki	UMEHARA (1929)
	M 22	"	(" , Δ*)	"	"
	M 23	"	(")	"	"
	M 24	"	(" , Δ)	"	"
	M 25	"	(" , Δ)	"	"
	M 26	"	(" , Δ)	"	"
	M 27	"	(" , Δ)	"	"
	M 28	"	(")	(")	"
	M 29	"	(")	(")	"
	M 30	"	(")	(")	"
	M 31	"	(")	(")	"
	M 32	"	(")	(")	"
	M 33	Late Tumuli	Japanese made	Iwahana Gumma, Kantō	

図29 田辺義一の化学分析資料リスト (田辺1962) (筆者一部編集)

が、それに対して後藤守一は東京帝国大学人類学教室にもう1面の三角縁神獣鏡(118鏡)が所蔵されていることを指摘し、万年山古墳はこの1面を含めた8面が出土したと主張した(後藤1926)。

その後1966(昭和41)年に『枚方市史』編纂のために東京大学で調査が行われた際には所蔵鏡が再度7面であったと記されている(北野1967)。この時点で所在不明であった1面は、梅原が報告していた三角縁神獣鏡76鏡であり、この鏡は木村定三コレクションの一つとして現在愛知県美術館に所蔵されていることが、岩本崇によって報告されている(岩本2011)。さらに岩本は、これまで118鏡の鈕とされてきた鈕片が、118鏡の同範鏡の鈕と比較して形状や大きさ・鈕座が異なることから、この鈕片が118鏡のものではなく別鏡種の9面目の三角縁神獣鏡の鈕と推定している(岩本2011)。よって現在は、万年山古墳からは2面の浮彫式獣帯鏡と7面の三角縁神獣鏡の計9面が出土したと考えられている。

この万年山古墳とM32・M29との関係性について考察する上で非常に有用となってくるのが、鏡片に附随していたメモ書きである。

万年山古墳関連書類の中には前述の封筒や濾紙以外にも、以下の2つのメモ書きが存在しており、内容から見て、(1)がM32、(2)がM29に対するメモ書きと推察される。

- (1)「1981.6.24 田辺義一先生の化学組成分析標本中にあったものを、山崎一雄先生が返却して下さった。単独破片。(人類のカードには“ガイトウ”するものなし)」
- (2)「1981年6月24日 田辺義一先生の化学組成分析標本中にあったもの。大阪府万年山古

墳(10435～10441計七面)のものの破片にはガイトウせず。たぶん、破片一括であろう。
cf.12097. 鏡(大阪府)16A-上」

M32を入れた封筒と上記メモ書きのどちらにも名前が記されている「田辺義一」とは、東京帝国大学の人類学科を卒業した後にお茶の水女子大学家政学部の教授として人類学と化学組成の研究を行った研究者であり、1979年に59歳の若さで亡くなった(小林和1980)。

田辺は東京大学在籍時代の1950年～1953年に万年山古墳出土三角縁神獣鏡を含む青銅器の化学組成分析を行っており(田辺1962)、論文巻末の化学分析対象リスト中では「Mannennyama, Ōsaka, Kinki」の鏡とされるM21～M32の計12面が万年山古墳出土鏡として分析対象となっていることから(図29)、封筒や濾紙に書かれる「M32」や「M29」の番号は、田辺の論文における各鏡の番号を示していると考えられる。ただし、M28～M32の5面については出土地が括弧付きとなっている点に注意が必要である。

この12面の中で、図29で「△」が鏡式名に付されているM22・M24・M25・M26・M27の5面は三角縁神獣鏡であるとの注釈があり(田辺1962:319)、さらに論文巻末の図版からはM24が三角縁神獣鏡の2鏡であり、M25が58鏡であると判断できる。そして「△」が付されていないM21とM23は、巻末の図版と化学組成分析表¹¹⁾の記載から、浮彫式獣帯鏡であると判断できる(田辺1962:278-279)。

つまり、対応する鏡は完全には分からないものの、出土地に括弧が付いていないM21～M27の7面は既存の万年山古墳出土鏡7面であると考えられ、実際に、これらの鏡の参考文献として梅原の報告¹²⁾が示

されている（図29）。ただし、この7面の鏡種構成は梅原が報告した際の7面の構成ではなく、枚方市史編纂時の1966年段階で東京大学に残っていた7面の構成と同じである点に注意が必要であり、田辺が分析した1950年時点で76鏡が既に東京大学の所蔵ではなかったことが推察される。なお、出土地に括弧が付いている残りのM28～M32の5面は全て破片であるとの注釈があり、田辺はそれらが全て三角縁神獣鏡の鏡片ではないかと推測している（田辺1962：319）。

今回見つかった三角縁神獣鏡内区片M32は、番号とメモ書きに記された経緯、鏡面に残るドリル痕や神像下の人為的な切断面などから見て、田辺の論文内の鏡片M32であることはほぼ間違いなく、4鏡片M29も同様に論文内の鏡片M29と考えるのが妥当であろう。なお、濾紙内の4鏡片をM32以外の残りのM28～M31の4鏡片に当てはめる考え方も可能だが、前述の通り、濾紙内の4鏡片を1つの鏡片に纏めた際に鏡面のドリル痕が亀裂の境界線上に存在することから（図28）、分析対象としては元々1つの鏡片M29であったものの、田辺が成分分析のためにドリルをあてた際に5つ以上の鏡片に割れたと考えられ、M28・M30・M31と呼ばれる鏡片は4鏡片とは別に存在するとするのが妥当であろう。これは、M32が「番外3」の封筒で、4鏡片M29が「番外1」のポリ袋であり、「番外2」が現存しないこととも一致する。

以上のことから、1950～53年に田辺によって分析が行われたM32とM29はそのまま田辺の分析標本の中に残され、田辺が死去した2年後の1981年に名古屋大学名誉教授で古文化財の化学分析研究者である山崎一雄が発見し、東京大学総合研究資料館（現総合研究博物館）に返却したものと考えられる。1981年には存在が確認されていたため、1989年の京都大学の三角縁神獣鏡目録に「内区片」として記載されたのであろう。そしてそのまま所在を忘れ去られ、再発見される2019年までの30年間、万年山古墳関連書類の中で埋もれていたのである。

7. M32の戦前の来歴の手掛かり

M32とM29が1950年には東京大学の人類学教室において万年山古墳出土鏡として所蔵されていたということは明らかになったが、1950年以前の報告では万年山古墳の出土鏡に単独鏡片が含まれるという記述は存在しないため、M32の戦前の来歴は不明である。田辺論文のリストでも鏡片5面の参考文献は空欄であり、出土地が括弧付きなのもこのためであろう（図29）。また、封筒やポリ袋に「番外」と書かれていることから、1950年時点でもこれら鏡片が万年山古墳

の鏡とは想定されつつも、正式な万年山古墳出土鏡とは認識されていなかったことが窺われる。

しかしながら、単独鏡片の記述は無くとも、万年山古墳出土鏡は本来割れて出土した多数の鏡片の集まりであり、欠損している部分も多いため、かつてはM32とM29が既存の万年山古墳出土鏡を構成する鏡片として認識されていた可能性が考えられる。

こうした目で、後藤の報告にある万年山古墳出土鏡の拓影（後藤1926：495-499）と現在の万年山古墳出土鏡を比較すると、万年山古墳出土鏡の内の1面である浮彫式獣帯鏡（以下浮彫①とする）の拓影に現存しない内区が確認でき、その形状や乳の位置から見て、この内区はM29の拓影であると考えられる（図30）。M29に描かれる文様は浮彫式の玄武でもあり、実際にM29を浮彫①の該当部分に充てたところ、鏡片同士がぴったり接合した（図30）。

よって、M29は既存の万年山古墳出土浮彫式獣帯鏡を構成する内区片の一つであり、後藤が報告した1926年時点では内区に含まれていたが、1950年に田辺が化学組成分析を行うまでの間に、M29の鏡片のみが番外鏡片としての扱いに変化したことが想定される。

M32については3章で鏡種を134鏡と特定しているため、M29のように既存の万年山古墳出土三角縁神獣鏡と接合することは無いものの、かつては同一鏡種と誤認されていた可能性はある。後藤が報告する万年山古墳出土鏡の拓本にM32とみられる拓影は無いものの、後藤の報告では後藤自身が追加した118鏡のみ拓本が掲載されていない（後藤1926）。内外区の半数以上を欠損している118鏡の写真が初めて世間に公表されたのは『枚方市史』（北野1967：図版23）であり、その時点で既に田辺がM32を単独鏡片として扱っていたため、田辺の前に後藤がM32をどう扱っていたかは不明だが、M32と118鏡は界圏が明らかに異なるため、後藤が同一鏡種と誤認していたとは考えにくい。

その118鏡に附随していた小さな資料カードに以下のような記載があった。

「10438

地名 河内國北河内郡枚方町枚方小字三矢.

萬年山古墳

名稱 四^{三カ}神四^{三カ}獸鏡

記事 共七面. 梅原氏考誌七ノ二（二）ニ當ルカ. 但シ「日月天王」ノ銘ナシ

古墳所在ハ共有地四二四番地

紙包ハ他鏡ノ断片ナリ

理學部人類學教室」

最後に記載の通り、これは理学部人類学教室時代の資料カードであるが、「10438」と「三カ」「三カ」は筆記具の違いから別筆である。ここで非常に重要となるのが、欄外に書かれた最後の「紙包ハ他鏡ノ断片ナリ」という文言である。「紙包」「他鏡ノ断片」という文言から考えて、M32とそれを入れた封筒を指すものだと考えるのが妥当であろう¹³⁾。

すると、このカードと文言がいつ・誰によって書かれたものなのかが問題となる。資料カードの内容を確認すると、「日月天王」の銘文が無いことを自認しつつも、118鏡を梅原の報告の(二)に相当する四神四獣鏡と推測しているが、梅原の報告の(二)は人類学教室から流出した四神四獣鏡の76鏡であり、自ら118鏡を三神三獣鏡と認定し、万年山古墳出土鏡の8面目に追加した後藤が118鏡を76鏡と誤認するはずがないため、カードの記載者は後藤ではないと言える。また、カードの記載者が118鏡を76鏡と誤認したということは、記載時には既に76鏡が人類学教室には存在していないことを示唆しており、118鏡を含めた東京大学総合研究博物館が現在所蔵する7面の構成を、118鏡を含めない梅原の報告時の7面の構成と比較したために鏡種を誤認したと想定される。

76鏡の拓本が後藤により報告されているため、後藤が報告した1926年の前後ではまだ76鏡が東京帝国大学人類学教室に存在していたと推測されることから、後藤の報告から田辺が分析を行う1950年までの間で、76鏡が人類学教室から流出した後に、後藤ではない人物によってこの資料カードが書かれたことになる。漢字片仮名交じり文であり漢字も旧字体でもあることから戦前の記載の雰囲気もあるが、1950年に田辺自身が記載した可能性もあろう¹⁴⁾。

8. M32と後藤守一

万年山古墳出土鏡のその他の鏡にも個々の資料

カードが附随しており、同じく地名・古墳名・鏡種・梅原文献・古墳所在地についての記載があるものの、「紙包ハ他鏡ノ断片ナリ」という記載は無い。

鏡片と紙包に関するこの文言が、後藤によって唯一追加された異色の118鏡の資料カードに記載されていることに筆者は注目し、後藤が遺した調査資料にM32の手掛かりがあるのではないかと考え、2022年1月31日に後藤守一資料を所蔵する天理大学考古学・民俗学研究室で調査を行った。

後藤守一資料は近年新たな発見が多いことで知られており、かつて同じく東京帝国大学人類学教室に所蔵されていたものの長らく所在不明となっていた群馬県頼母子古墳出土「有銘四神四獣鏡」が、伝岐阜県可児市出土とされてきた南山大学所蔵の三角縁神獸鏡25鏡(長瀬1999)そのものであることが後藤の拓本資料から明らかにされたり(車崎2019)¹⁵⁾、三角縁神獸鏡の新鏡種(220b)の拓影が発見される(岩本2020)などの事例が知られている。

調査当日、膨大な後藤守一資料の中から三角縁神獸鏡関連の資料をピックアップしていただき、M32と照合したところ、M32とみられる鏡片の拓影を含む

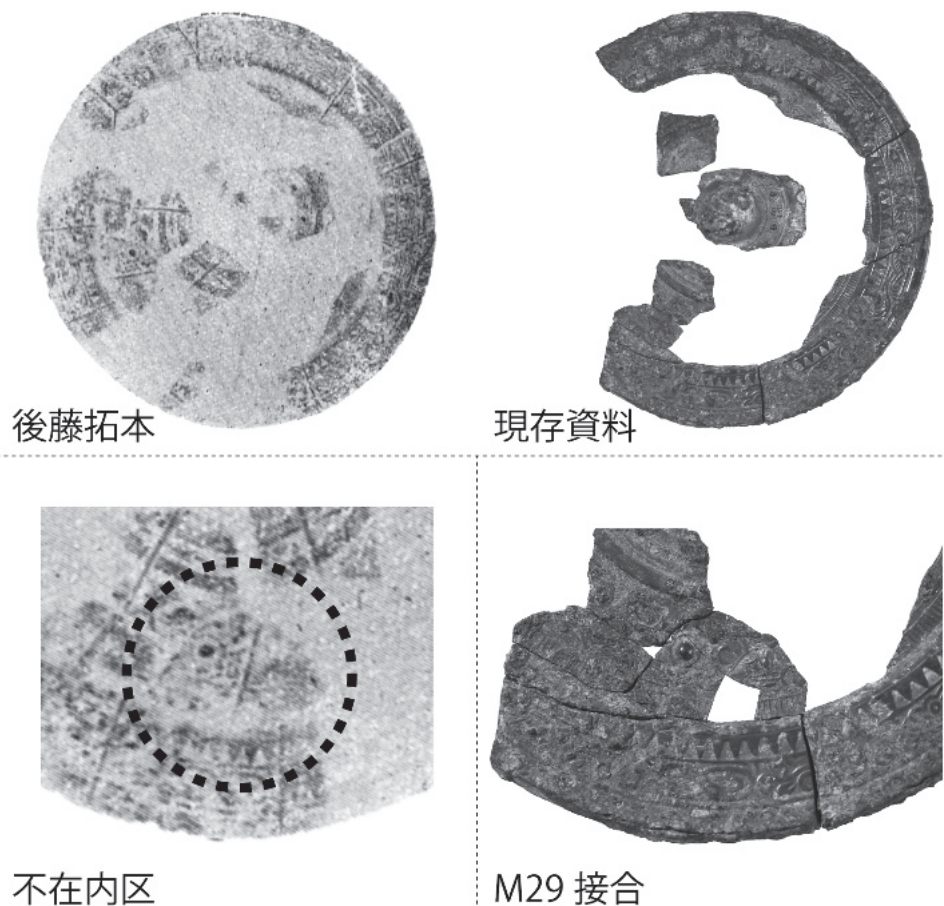


図30 万年山古墳出土浮彫式獸帯鏡(浮彫①)の拓影とM29

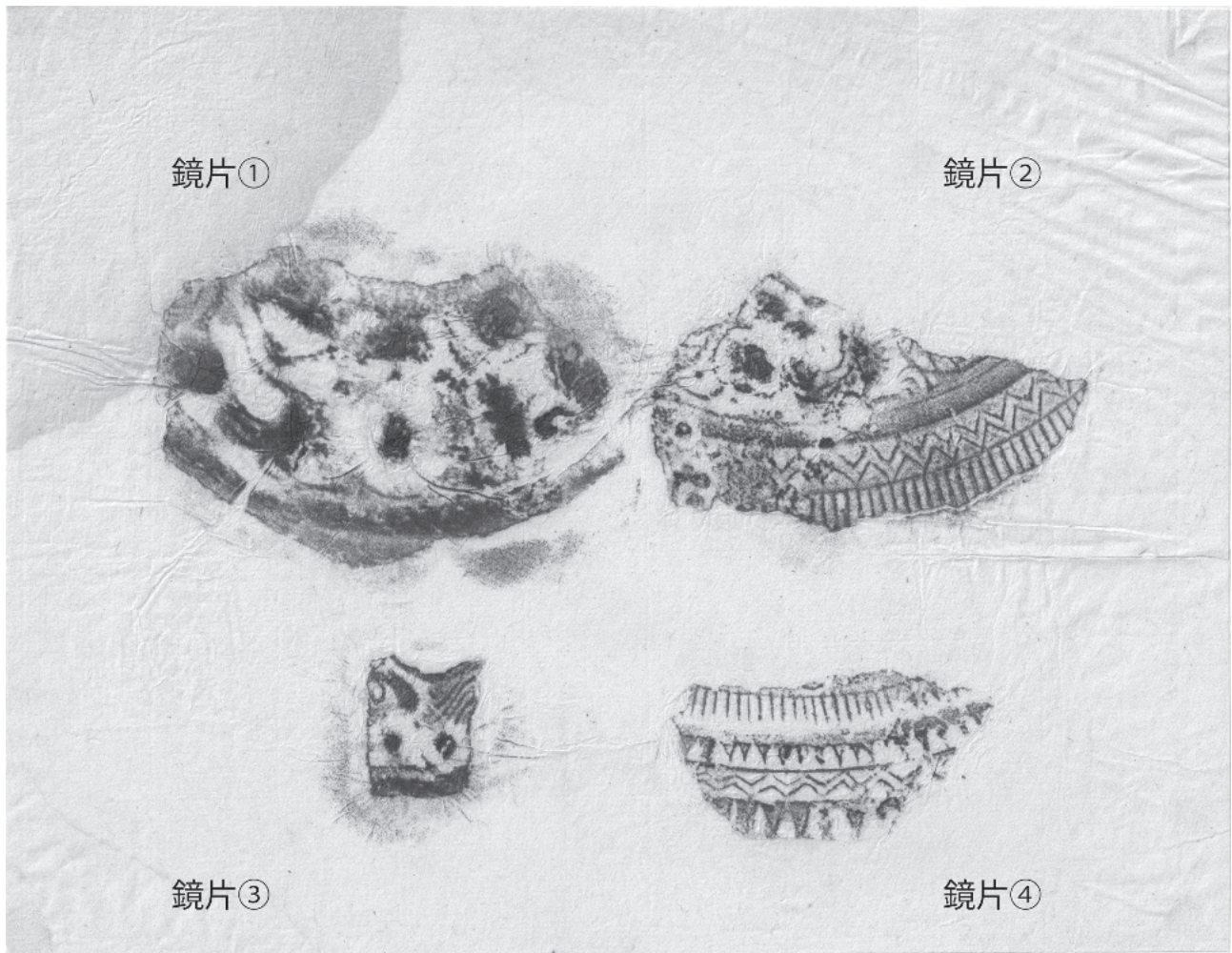


図31 後藤守一の拓本資料

拓本1枚を発見した(図31)。拓本に含まれる4つの鏡片の内、左上の鏡片①がM32であるが、神像の下に界圏幅程度の拓影が確認でき、人為的に削られる前の状態を垣間見ることができる。

後藤守一資料の鏡の拓本の多くは、鏡の寸法や出土地名、『漢式鏡』(後藤1926)の番号などの注記が拓本の端などに書かれている場合が多いが、今回の拓本には後藤の注記は一切残されていない。そのため、後藤がM32を万年山古墳出土鏡として拓本を取ったかどうかは定かではないが、1926年に万年山古墳出土鏡の報告を行った後藤の拓本資料にM32が含まれること、後藤が唯一追加した118鏡に附随する資料カードにM32らしき「他鏡ノ断片」の記載があること、1950年時点でM32が「番外」という認識ではあるが万年山古墳出土鏡として扱われていたことなどを踏まえると、M32は1926年以前から118鏡と共に東京帝国大学人類学教室に所蔵されており、所蔵を確認し拓本も取った後藤によって118鏡と共に万年山古墳出土鏡として認められたものの、鏡種の判断が難しい小鏡片であったことから1926年の『漢式鏡』では記述が

無かったと考えるのが妥当であろう。

図31のM32以外の3つの鏡片については、同一半紙上の拓影のため、一般的には同時に拓本を取ったと考えるのが妥当である。その場合、他の3鏡片もM32と同様に、当時東京帝国大学人類学教室に所蔵されており、後藤によって万年山古墳出土鏡として扱われたものと考えられるが、ここで思い出されるのが田辺論文にあった現存しない3鏡片M28・M30・M31と、存在が想定される「番外2」の纏まりである。田辺論文の番号と「番外2」の存在から、1950年時点で万年山古墳出土鏡として考えられていた番外鏡片が別に3片存在していたことは明らかであり、拓本上のM32以外の鏡片の数と一致していることから、対応関係は不明だが、鏡片②～④の3鏡片がM28・M30・M31の正体であると言えるだろう。

以上のことからM32は、1926年以前において118鏡・M28・M30・M31と共に東京帝国大学人類学教室に所蔵されており、後藤によって万年山古墳出土鏡に加えられたものの118鏡のみ正式な報告がなされ、小鏡片であるM32は鏡種不明な番外鏡片としてM28・

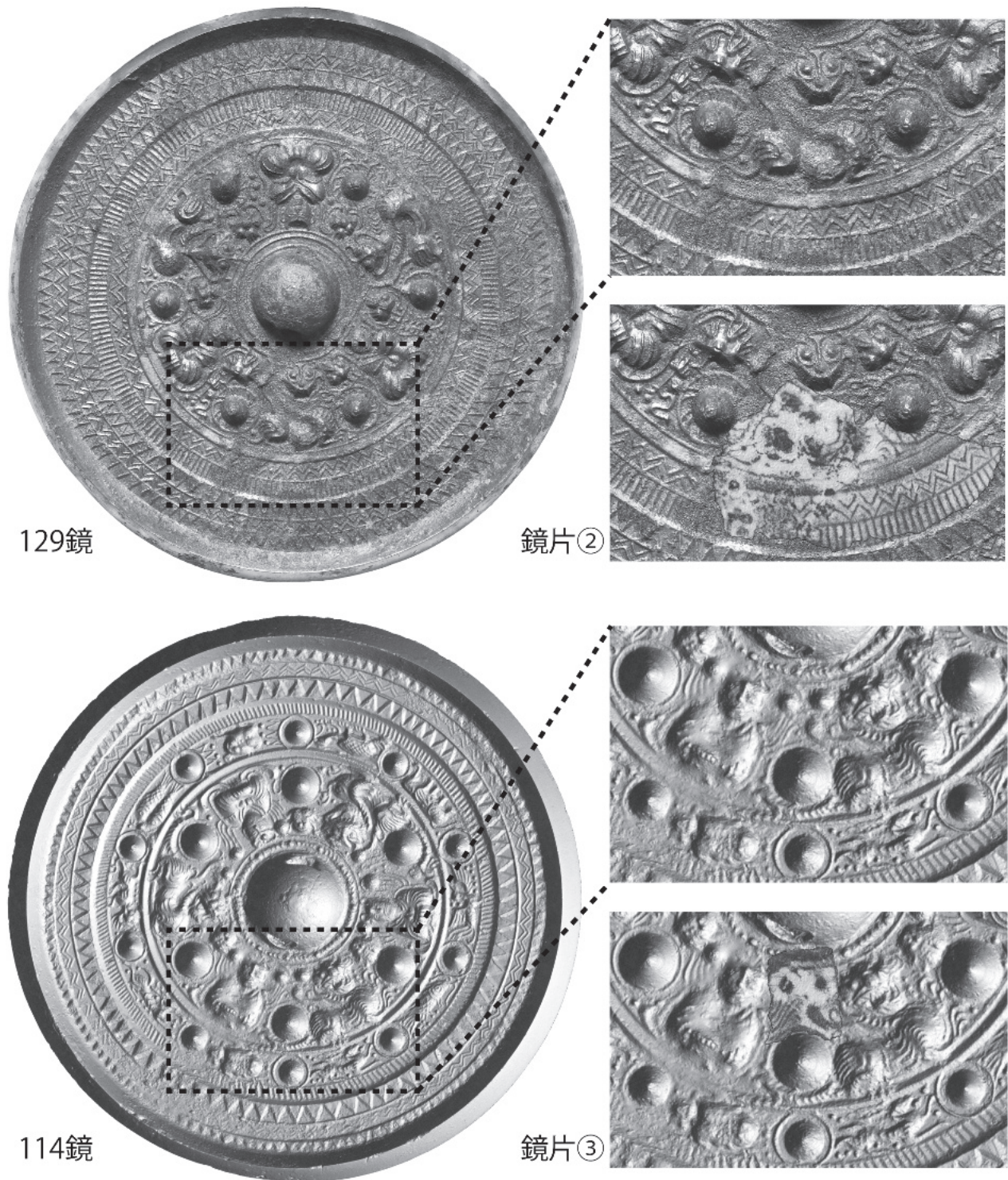


図32 鏡片②・鏡片③と129鏡・114鏡

M30・M31と共に118鏡に附随して纏められ、その後1950年に田辺の分析資料となったと考えられる¹⁶⁾。そして田辺が分析する際には、既存の浮彫①の内区の一部が分離されM29として番外鏡片に追加されており、田辺の分析以降、M28・M30・M31は再発見されていないまま現在に至るのである。

9. 万年山古墳の出土鏡

上記来歴に基づき万年山古墳出土鏡に新たに含めることとなったM28・M30・M31（鏡片②・③・④）3面の鏡種については、既存の三角縁神獸鏡と拓影を照合した結果、内区が残存している鏡片②と鏡片③は各々129鏡と114鏡であることが判明した（図32）。

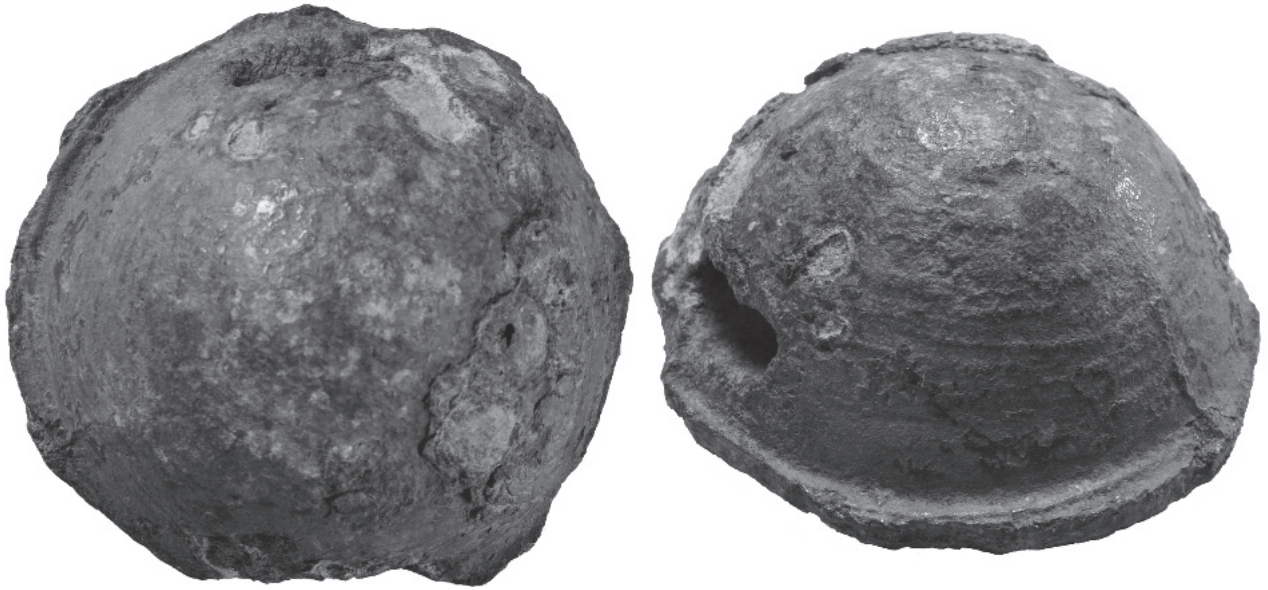


図33 万年山古墳出土 鈕片A

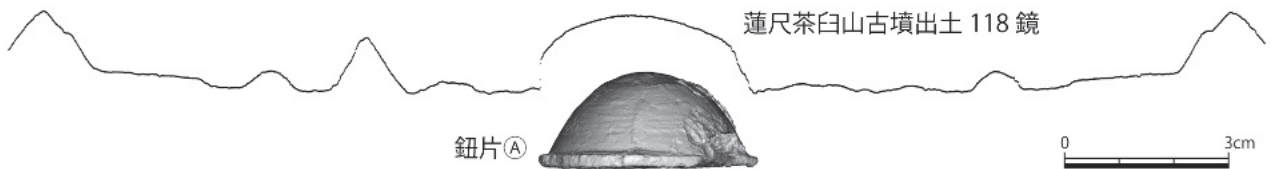


図34 鈕片A¹⁷⁾と118鏡の鈕形態比較

129 鏡は現在兵庫県の山古墳出土鏡・根津美術館蔵鏡の2面が知られているが、どちらも完形鏡で鏡片②の該当部分が残存しているため、鏡片②は129 鏡の新たな3面目の同範鏡とすることができる。また、114 鏡は現在大阪府真名井古墳出土鏡・奈良県新山古墳出土鏡・伝京都府南部出土鏡・群馬県蟹沢古墳出土鏡の4面が知られているが、真名井鏡と新山鏡は完形鏡であり、伝京都鏡と蟹沢鏡は残存部分が僅かながら鏡片③の該当部分と重複していることから、鏡片③も114 鏡の新たな5面目の同範鏡とすることができる。

内区外周と外区のみである鏡片④は鏡種の同定が難しく、内区外周は僅かに左に傾く櫛歯文帯とその内側に僅かな線が見える程度であり、内区外周斜面には鋸歯文が無いと読み取れ、外区は三角縁神獣鏡に一般的な鋸歯文帯／複線波文帯／鋸歯文帯の3帯構成を取るため、鏡片④は三角縁神獣鏡片であると思われるが、筆者は鏡種を同定することはできなかった¹⁸⁾。

なお、鏡片④が既存の万年山古墳出土三角縁神獣鏡6面(2 鏡・35 鏡・58 鏡・76 鏡・111 鏡・118 鏡)および今回再発見した三角縁神獣鏡片3面(114 鏡・129 鏡・134 鏡)と同一個体である可能性については、2 鏡・35 鏡・58 鏡・76 鏡は外区の欠損が無いもしくは鏡片④より欠損が小さい点、111 鏡は内区外周斜面

に鋸歯文が有る点、134 鏡は内区外周の櫛歯文帯の内側が2重の圈線である点で鏡片④と同一個体とは言えない。残った中で114 鏡と129 鏡は、文様が鮮明な完形の同範鏡の外区と比較した結果、鏡片④とは異なると筆者は判断したが、最後の118 鏡は万年山古墳出土鏡以外の同範鏡が、文様の残りの悪い同範鏡1面のみであるため外区文様での比較が困難である。しかしながら、鏡片④は拓影において内区外周斜面の幅がある程度広いため、鏡片④は内区外周斜面の段差がある程度高い鏡であることが想定でき、内区外周斜面の段差がかなり低い118 鏡とは鏡種が異なると判断できる。

以上のことから、大阪府万年山古墳から出土したと考えられる鏡はこの時点で、浮彫式獸帯鏡2面、三角縁神獣鏡9面(2 鏡・35 鏡・58 鏡・76 鏡・111 鏡・114 鏡[鏡片③]・118 鏡・129 鏡[鏡片②]・134 鏡[M32])、三角縁神獣鏡?外区片1面[鏡片④]、三角縁神獣鏡?鈕片1面(岩本2011)の計13面である。しかしながら、鏡片④と鏡種が判明している三角縁神獣鏡9面が別の鏡種であることは示したものの、岩本が分離した三角縁神獣鏡?鈕片(以下鈕片Aとする)については三角縁神獣鏡9面との比較を行っていないため、面数を確定できていない。

まず鈕片A(図33)の来歴についてだが、6章で

も簡単に触れた通り、鈕片④は従来万年山古墳出土118鏡の鈕として取り扱われてきたが、118鏡のその他の鏡片との間に接合関係が無い点と、唯一の118鏡の同範鏡である香川県蓮尺茶臼山古墳出土鏡の鈕と鈕片④の形態が異なる点（図34）から、岩本によって118鏡とは別鏡種として分離され（岩本2011）、118鏡以外の既存の万年山古墳出土鏡には鈕片が残存していたため、鈕片④は万年山古墳出土の9面目の新鏡種として追加された。

鈕片④を比較するためには何らかの手掛かりが必要であるが、鈕片④は大半を半球状の鈕が占めており、鈕の周辺部分は僅かしか残存していない。唯一の手掛かりは、その僅かな周辺部分で確認できる1条の弧線（図33）である。鈕片④が「円座を採用」（岩本2011：22）すると岩本が判断した根拠がこの弧線の存在故かは不明であるが、図33の通り、この弧線は鈕の下に潜り込むことから、単純に鈕座とは考えられない。

前述した通り、118鏡と鈕片④を除く既存の万年山

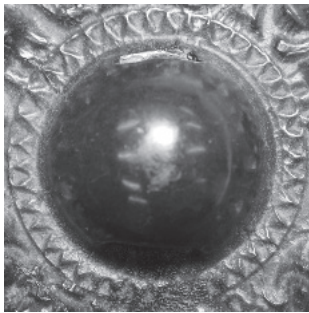


図35 134鏡の鈕周辺

古墳出土三角縁神獸鏡5面には鈕が現存するため、鈕片④の候補として考えられる鏡種は、本論文で新たに追加した114鏡・129鏡・134鏡の3鏡種であるが、M32の134鏡

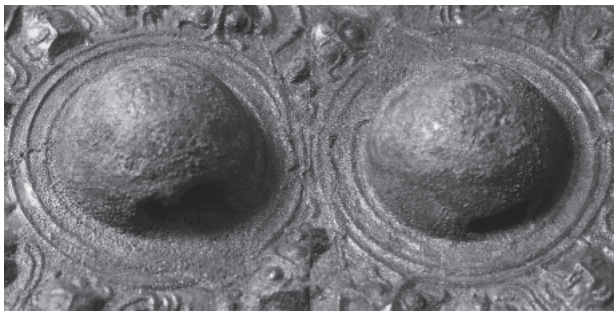


図36 129鏡の鈕周辺

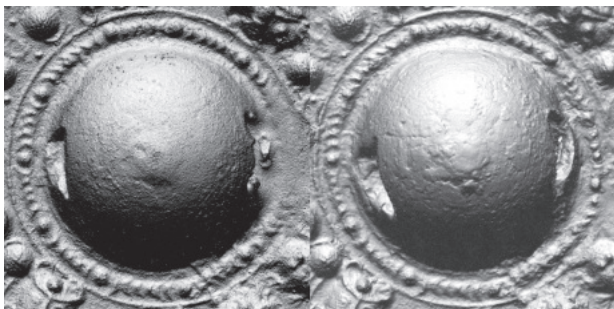


図37 114鏡（左：新山鏡 右：真名井鏡）の鈕周辺

は同範鏡の鈕周辺に鈕片④で見られる弧線が存在しないため（図35）、鈕片④はM32・134鏡の鈕ではない。一方、129鏡の同範鏡の鈕周辺には、鈕片④の弧線に似た線描きの鈕座が3重に廻っているが（図36）、線の太さが鈕片④の弧線とは異なり、また、最も鈕に近い圏線は鈕から一定の距離を保って周囲を廻っているため、途中で途切れる鈕片④の弧線と同一とは考えにくく、鏡片④は129鏡の鈕とは言えない。

鈕片④の最後の候補である114鏡は有節重弧文の鈕座を持ち、有節重弧文座の外側には一円の圏線が明確に描かれる。その一方で、図37で見て左側の鈕孔から反時計回りに鈕の根元を沿う弧線らしき陰影が114鏡の三次元計測画像上では確認できる（図37）。大阪大学考古学研究室が所蔵する真名井古墳出土114鏡を実見したところ、該当する鈕の根元において僅かな弧線を確認することができた。錆などの影響から鈕の下に線が潜り込む現象は確認できなかったものの、図37で見て右側の鈕孔までの間の2/3程度の場所で弧線は消えており、図37で見て上側の鈕の根元では弧線は全く確認できなかった。図33の右側の写真で確認できる鈕片④の側面にある縦長の傷と似た傷が、真名井鏡の鈕のほぼ同じ位置で錆と同化しながらも小さく確認できたことを傍証として、鈕片④は114鏡の鈕と考えたい。

鈕の形態については、図20のように同範鏡内でも変化する可能性があり、鑄造後の研磨・使用による摩耗・錆による変化・発掘後の研磨など様々な要因により変化するものであることから、一定の傾向を見ることが出来る指標ではあるものの、鏡種の特定には向かない指標であると筆者は考えているが、鈕の形態が公開されている114鏡（新山鏡・真名井鏡）と比較したところ、鈕片④がそれら2面より一回り小さいという結果となった（図38）。しかしながら、どちらも岩本分類の鈕a式（岩本2008）の枠に収まる程度の差異であり、また、新山鏡と真名井鏡の鈕頂には突起が確認できる一方（図37）、鈕片④の鈕頂では突起は存在しておらず（図33）、この差異が研磨や摩耗による消失なのか製作方法の変化なのかは不明だが、どちらにせ

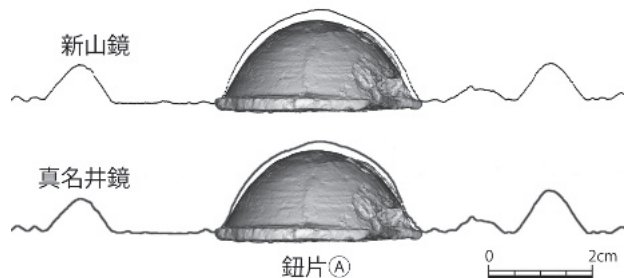


図38 鈕片④と114鏡の鈕形態比較

よ鈕片④が114鏡であることの否定にはならないであろう。

以上の検証の結果、大阪府万年山古墳から出土した鏡は、浮彫式獣帯鏡2面、三角縁神獣鏡9面（2鏡・35鏡・58鏡・76鏡・111鏡・114鏡〔鏡片③／鈕片④〕・118鏡・129鏡〔鏡片②〕・134鏡〔M32〕）、三角縁神獣鏡？外区片〔鏡片④〕1面の計12面であると言える（表4）。

10. 万年山古墳出土鏡の意義

眼下に淀川が流れる景勝地であるとともに、大阪湾から淀川を北上する際に東側で最初に見える丘陵である枚方丘陵の最北端という非常に重要な場所に位置する万年山古墳から、所謂舶載三角縁神獣鏡9面を含む12面の中国鏡が出土した事実を、本来であれば、周囲の古墳・集落遺跡・出土遺物・地理的要因などを踏まえ、万年山古墳の社会的・地域的な意義を考える必要があるのだろうが、古くからの地形改変や鏡が発見された際の地均し工事によって万年山古墳の墳丘や遺構・遺物の大部分が失われてしまったことにより、万年山古墳の築造年代を特定することができないために、そういった考察は難しい。

所謂仿製三角縁神獣鏡を含まず舶載三角縁神獣鏡のみを出土することから、万年山古墳を前期古墳と考える論者も多いが（岩本2011, 2020；下垣2016等）、今回新たに追加した出土鏡も、鏡種の判明している3面全てが舶載三角縁神獣鏡であった。これまで銅鏡を10面以上出土した前期古墳は17例のみであり、その中で三角縁神獣鏡を9面以上出土している前期古墳は

8例のみしか存在しないとされるため（岡林2024）、仮に前期古墳であった場合の万年山古墳の意義は非常に大きく、その立地を加味しても、その被葬者の社会的重要性が非常に大きかったことが推測される。

11. おわりに

以上、東京大学総合研究博物館に所蔵されていた三角縁神獣鏡内区片M32について資料報告を行うとともに、同範鏡内での製作順序と再発見に至るまでの来歴、万年山古墳の出土鏡構成について多くの紙面を割いて考察させてもらった。

結論としては、M32は134鏡の同範鏡8面の中で⑤田邑2号鏡と⑥阿保親王塚鏡の間に製作された6番目の同範鏡であると考えられ、現在に至る来歴は表5の通りと推察される。

M32の来歴の追跡の過程で、田辺論文において万年山古墳出土鏡片と記載のある詳細不明のM28・M30・M31の3鏡片に相当すると考えられる3つの三角縁神獣鏡片の拓影がM32と同じ拓本資料上で見つかり、さらに3鏡片の内の1つが、万年山古墳出土の鏡種不明な鈕片④と同一個体であると考えられることから、最終的に万年山古墳からは浮彫式獣帯鏡2面、三角縁神獣鏡9面、三角縁神獣鏡？外区片1面の計12面が出土したと考えられる（表4）。万年山古墳は墳丘や遺構・遺物の大部分が失われているために築造年代や古墳の全貌が分からないものの、この出土面数と特異な立地から考えて、重要な古墳であったことは間違いないと言えよう。

なお本稿は、かなりの紙面を詳細な図版と上記結論

表4 万年山古墳出土鏡 12面

鏡式	目録番号	所蔵先	梅原1916	後藤1926	岩本2011
浮彫式獣帯鏡		東京大学総合研究博物館 [浮彫②]	口	m.220(,2)	鏡2
		東京大学総合研究博物館 [浮彫①]	ハ	m.221	鏡1
		東京大学総合研究博物館 [M29]			
三角縁神獣鏡	2	東京大学総合研究博物館	ホ	m.225,2	鏡6
	35	東京大学総合研究博物館	イ	m.225,1	鏡4
	58	東京大学総合研究博物館	ヘ	m.223	鏡5
	76	愛知県美術館	ニ	m.222	鏡3
	111	東京大学総合研究博物館	ト	m.224	鏡7
	118	東京大学総合研究博物館		m.225,3	鏡8
	114	東京大学総合研究博物館 [鈕片④]			鏡9
		所在不明 [後藤拓本：鏡片③]			
	134	東京大学総合研究博物館 [M32]			
	129	所在不明 [後藤拓本：鏡片②]			
	外区片	所在不明 [後藤拓本：鏡片④]			

表5 M32の来歴

西暦	M32		その他の 万年山古墳出土鏡
	来歴	所在	
1904年	万年山古墳発見	東京帝国大学	浮彫①・浮彫②・2鏡・35鏡・58鏡・76鏡・111鏡の7面が報告 118鏡・M28・M30・M31の4面も共に発見 万年山古墳出土鏡と認められ、118鏡以外はM32と共に拓本作成
1916年	(梅原 万年山古墳報告) M32 未確認 M32 が人類学教室に所蔵されていることを後藤が発見 万年山古墳出土鏡と認め、拓本も取られる		
1926年	(後藤『漢式鏡』) M32 未報告 M28・M30・M31と共に番外鏡片として纏められ、118鏡に附随 後藤以外の人物により、「他鏡ノ断片」の記載のある資料カードが作成		
1950年	万年山古墳出土の番外鏡片として、田辺の化学組成分析の対象となり、「M32」の番号が附される以後、田辺が保有	田辺	万年山古墳出土鏡全てが田辺の分析対象となる 各番外鏡片に附番 M29は以後田辺が保有 M28・M30・M31は以後所在不明
1953年			
1962年	田辺の化学組成分析論文公表	東京大学総合研究博物館	M29も同時に返却 76鏡再発見 岩本により、118鏡から鈕片④が分離
1981年	田辺の没後、山崎により東京大学へ返却		
1989年	三角縁神獣鏡目録に出土地不明の「内区片」と掲載		
2011年			
2019年	筆者により再発見		
2025年	本稿公表		

に至るまでの考察過程の記述に割いているが、三角縁神獣鏡はその希少性と注目度故に、研究者以外による資料調査の難易度が非常に高く、文字上のみでの分析や結論のみの記述だけでは研究者以外の再検証が難しいため、根拠となる図版や考察過程に重点を置いて本稿を構成している。それらを多く記載しているが故に誤魔化しの利かない部分も多く、強引な説明が多少見受けられる点は反省すべき点である。

また今回、M32の来歴を辿るに際して、天理大学所蔵の後藤守一資料の調査を行ったが、調査時に確認した資料は後藤守一資料全体のごく一部に過ぎず、未だ手付かずの大量の資料が眠ったままであった。三角縁神獣鏡の分野だけでも様々な発見がこれまで後藤守一資料から見つかっているため、他の分野においても新発見の宝庫であると思われ、今後の研究者の発見に期待したい。

謝辞

私が東京大学総合研究博物館所蔵の三角縁神獣鏡内区片について興味を持ったのは、学部4年生時の2017年4月、まさに卒業論文の題材を探している最中であった。4年次の年度頭に開催された卒論テーマ発表会の初回に、三角縁神獣鏡目録に「東京大学総合資料館」（現総合研究博物館）所蔵と記載のある出土地不明の鏡片について卒論を書く構想を発表したことを今でも覚えている。当時の私の指導教員はこの年を最後に東京大学を退官された故大貫静夫名誉教授であり、手掛かりも何も無い鏡片を卒論にするのはやめたほうが良いとご助言をいただいたことが鮮明に思い出される。その後、2019年9月に内区片M32をこの手で再発見し、本来は2024年3月発刊の考古学研究室研究紀要にて公表する予定であったが、生来の怠惰故に遅れ、2025年3月、遂にこの資料報告を公表することができた。

本稿は、2023年末にご逝去された故大貫静夫名誉教授並びに東京大学考古学研究室の設楽博己名誉教授、根岸洋准教授、佐藤宏之名誉教授、福田正宏准教授、石川岳彦元助教（現南山大学教授）には数々のご指導を賜わり、森先一貴准教授、新井才二助教には本稿の投稿に際してご高配を賜った。また、鏡については、車崎正彦先生に在学中から多大なご助言をいただいた。

資料調査に際しては、下記の諸氏・諸機関にお世話になった。記して感謝の意を表したい。

安達香織、有馬伸、稲葉佳代子、尾崎光伸、小田木治太郎、海部陽介、木村理、近藤大典、土屋隆史、徳田誠志、花木宏修、宮川禎一、山田邦和、朝来市埋蔵文化財センター、阿保山親王寺、大阪大学考古学研究室、岐阜県博物館、京都国立博物館、宮内庁書陵部、天理大学考古学民俗学研究室、東京大学総合研究博物館、広島県立歴史博物館

(50音順・敬称略)

本研究はJSPS 科研費JP20J22856の助成を受けたものである。

註

- 1) 2024年6月の『古代文化』に掲載された田邑2号鏡の資料報告（岩本2024）において、岩本が当該鏡片の概要について触れているが、筆者は関与していない。本稿が第1報である。
- 2) M32の断面図は、筆者撮影の写真を基にAgisoft Metashapeで作出力した3Dモデルを、Cloud Compareを用いて断面図として図面化したものである。
- 3) 目録番号とは、1989年に京都大学によって文様の異なる

三角縁神獣鏡に各々附された番号であり（京都大学文学部考古学研究室編 1989）、文様が共通する鏡においては目録番号も共通する。その後、新たな鏡種の発見などによって目録番号は更新されており、執筆時点で最新の目録番号は岩本崇の『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』（岩本 2020）に掲載されている目録の番号である。本論文では基本的に岩本の目録番号に準ずる。

- 4) 三角縁神獣鏡が同范技法で作成されたのか、同型技法で作成されたのか、もしくは別の方法で作成されたのかは議論のあるところではあるが、本論文では学史的用語として、同じ文様の三角縁神獣鏡を「同范鏡」と呼称する。
- 5) 伝奈良県渋谷出土鏡は、19世紀前半頃に装幀された『鏡研搨本』に既に拓影が存在し、「和州城上郡渋谷村 崇神陵近傍出土」という箱書きがあることから、渋谷向山古墳近傍で出土したものと推定されている（下垣 2010）。
- 6) 表1の「伝天理市鏡」=③伝渋谷鏡、「田邑丸山鏡」=⑤田邑2号鏡
- 7) 藤丸論文の元々の表では、「佐味田貝吹鏡」・「田邑丸山鏡」・「阿保親王塚鏡」・「掛迫鏡」の4面における范傷eの様相が「○」とされていたが、その4面よりも铸造順が前であるとされる「伝天理市鏡」における様相が「+○」であり、「伝天理市鏡と佐味田貝吹鏡の間ではこの傷の状態にほとんど変化がみられない」（藤丸 2005：4）、「この傷は田邑丸山鏡、阿保親王塚鏡、掛迫鏡の鏡間で同じ程度の大きさであり、また、佐味田貝吹鏡よりもそれほど拡大した様子がみられない」（藤丸 2005：7）という范傷eに関する記述を基に、上記4面の范傷eの様相を「+○」と修正した。
- 8) 藤丸の考察は、⑤田邑2号鏡と⑥阿保親王塚鏡の分析が写真観察によるものである点で、筆者と条件が異なることに注意が必要である。
- 9) 本調査はJSPS 科研費 JP20J22856 の助成を受け2021年12月から2022年3月までに実施された資料調査（①円満寺山鏡、③伝渋谷鏡、④貝吹鏡、⑥阿保親王塚鏡、⑦掛迫鏡）および2024年12月に実施された資料調査（⑤田邑2号鏡）であるが、内区文様の残存状態が悪い②宝塚鏡は橿原考古学研究所作成の三次元計測画像（奈良県立橿原考古学研究所編 2006）を基に分析を行った。
- 10) ②宝塚鏡の鈕は中心に位置していないなど（図3）、復元状態に疑問の余地があるため、本来の鈕孔方向は不明である。
- 11) 田辺の化学組成分析表ではM23が「God and Animal design」つまり神獣鏡で、M24が「Animal design」つまり獣帯鏡と記載されているが（田辺 1962：279）、論文巻末の図版からM24が三角縁神獣鏡の2鏡であることは明らかであるため、巻末のリスト（図29）を踏まえると、化学組成分析表ではM23とM24の鏡種が逆になっていると考えられる。
- 12) 図29で田辺は梅原の1929年の論文を参考文献としているが、文献リストには「1929. Mannen-yama Tumulus, Hirakata-machi, Osaka Prefecture and its Remains. Kokogaku Zasshi (Jour. Archaeol. Soc. Nippon), 7：114-117. (Japanese)」(田辺 1962：316)とあることから、梅原による1916年の万年山古墳の報告の誤記であろう。
- 13) 「他鏡ノ断片」には現存しない番外2の鏡片群なども含ま

れている可能性があり、「紙包」も現在の封筒ではなく、幾度か更新されている可能性もあろう。

- 14) なお、118鏡にはもう1つ資料カードが附随しており、その資料カードは「No.028」「地名 河内國」「名称 漢鏡」のみが記載された「東京帝大理學部人類學教室」のより小さな資料カードであるが、「東京帝大」であることからこちらは戦前の資料カードであることがほぼ確実であり、この資料カードが「他鏡ノ断片」の元々の資料カードである可能性はあるが、118鏡の昔の資料カードである可能性もあり、詳細は不明である。
- 15) 天理大学が所蔵する後藤の別の拓本資料に、「伏見村伏見」と注記のある外区鏡片の拓影があるが、この鏡は同じく南山大学所蔵の岐阜県可児郡御嵩町伏見東寺山古墳出土斜縁二神二獣鏡片（尾関 1990）であることが今回確認できた。可児地域と後藤守一に何らかの関係性があったことが窺われる。
- 16) M32及びその他の鏡片の1920年代以前の来歴は厳密に言えば不明であり、万年山古墳出土鏡とは認められないという反論もあろうかと想像するが、後藤が追加した118鏡も人類学教室以前の来歴は実際のところ不明であり、現在万年山古墳出土鏡として118鏡が正式に認められていることを加味すれば、M32およびM28・M30・M31も万年山古墳出土鏡として認めてよいだろう。
- 17) 鈕片④の3Dモデルは註2同様、筆者撮影の写真を基にAgisoft Metashapeで作成した。
- 18) 今回鏡片④の鏡種を同定することができなかったが、特徴的な部分が多い鏡片ではある。内区外周の櫛歯文帯の内側には僅かに文様と思しき線が残るが、空白の多さから見て波文帯ではなく銘帯か獣文帯であろう。また、外区の内側の鋸歯文の横幅が非常に狭いのに対し、外側の鋸歯文は横幅と高さがある点も特徴的である。これらの点から、鏡片④の鏡種は7鏡・54鏡・93鏡・123鏡などに近いのではないかと筆者は考えている。

引用文献

- 岩本 崇 2008 「三角縁神獣鏡の生産とその展開」『考古学雑誌』92（3）：1-51
- 岩本 崇 2011 「木村定三コレクション 大阪府枚方市万年寺山古墳出土三角縁神獣鏡」『木村定三コレクション研究紀要』7-24, 愛知県美術館
- 岩本 崇 2020 『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』六一書房
- 岩本 崇 2024 「岡山県津山市田邑丸山2号墳出土の三角縁神獣鏡」『古代文化』76（1）：76-80
- 梅原末治 1916 「河内枚方町字万年山の遺蹟と発見の遺物に就きて」『考古学雑誌』7（2）：50-53
- 岡林孝作 2024 「『邪馬台国の時代』と古墳：権力基盤継承の観点から」『考古学が解明する邪馬台国の時代』一般社団法人日本考古学協会、28-37
- 尾関 章編 1989 『濃飛の古墳時代』岐阜県博物館
- 尾関 章 1990 「東寺山古墳出土の鏡片について」『岐阜県博物館調査研究報告』11：43-51
- 加藤一郎・土屋隆史・的場匠平 2018 「阿保親王墓墳丘外形調査および出土品調査報告」『書陵部紀要』70 [陵墓篇]：27-53, 宮内庁書陵部
- 岸本直文 1989 「三角縁神獣鏡製作の工人群」『史林』72

(5): 1-43

- 北野耕平 1967「万年山古墳」枚方市史編纂委員会編『枚方市史』1, 枚方市役所, 279-285
- 京都大学文学部考古学研究室編 1989『椿井大塚山古墳と三角縁神獸鏡』京都大学文学部博物館図録, 京都大学文学部
- 車崎正彦 2019「三角縁神獸鏡から見た群馬の前期古墳」『群馬に古墳が造られ始めたころ: 古墳成立期の様相と古墳出現の背景を探索』令和元年度高崎市観音塚考古資料館第31回企画展, 高崎市観音塚考古資料館, 29-34
- 後藤守一 1926『漢式鏡』日本考古学体系, 雄山閣
- 小林和正 1980「田辺義一氏追悼文」『人類学雑誌』88(2): 65-67
- 小林行雄 1971「三角縁神獸鏡の研究: 型式分類編」『京都大学文学部紀要』13: 96-170
- 下垣仁志 2010「伝洪谷出土の三角縁神獸鏡」『玉手山 1 号墳の研究』大阪市立大学考古学研究報告第4冊, 大阪市立大学, 216-220
- 下垣仁志 2016『日本列島出土鏡集成』同成社
- 田辺義一 1962「A Study on the Chemical Compositions of Ancient Bronze Artifacts Excavated in Japan」『東京大学理学部紀要』第五類人類学, 第二冊第三篇, 262-327
- 長瀬治義 1999「西寺山古墳の鏡」高橋克壽・魚津知克編『前波の三ツ塚』可見市埋文調査報告34, 可見市教育委員会, 183-184
- 奈良県立橿原考古学研究所編 2006『3次元デジタルアーカイブ古鏡総覧』学生社
- 藤丸詔一郎 2005「三角縁神獸鏡の製作技術について: 同範鏡74鏡群の場合」『北九州市立自然史・歴史博物館研報告』B類歴史2: 1-20, 北九州市立自然史・歴史博物館
- 水野敏典編 2017『三次元計測を応用した青銅器製作技術からみた三角縁神獸鏡の総合的研究』平成25年度～平成28年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)科研報告書

図表出典

- 図1 筆者撮影(東京大学総合研究博物館所蔵)(断面図筆者作成)
- 図2 134鏡: 奈良県立橿原考古学研究所編2006
M32: 筆者撮影(東京大学総合研究博物館所蔵)
- 図3 ①円満寺山鏡: 筆者撮影(岐阜県博物館所蔵)
②宝塚鏡: 奈良県立橿原考古学研究所編2006
③伝洪谷鏡: 筆者撮影(京都国立博物館所蔵)
④貝吹鏡: 筆者撮影(宮内庁書陵部所蔵)
⑤田邑2号鏡: 筆者撮影(山田邦和氏蔵)
⑥阿保親王塚鏡: 筆者撮影(阿保山親王寺所蔵)
⑦掛迫鏡: 筆者撮影(広島県立歴史博物館所蔵)
- 図4 A: ④貝吹鏡: 筆者撮影(宮内庁書陵部所蔵)
B: ⑤田邑2号鏡: 筆者撮影(山田邦和氏蔵)
- 図5 筆者撮影(東京大学総合研究博物館所蔵)
- 図6 藤丸2005(筆者一部加筆)
- 図7～17 ①円満寺山鏡: 筆者撮影(岐阜県博物館所蔵)
②宝塚鏡: 奈良県立橿原考古学研究所編2006
③伝洪谷鏡: 筆者撮影(京都国立博物館所蔵)
④貝吹鏡: 筆者撮影(宮内庁書陵部所蔵)
⑤田邑2号鏡: 筆者撮影(山田邦和氏蔵)

⑥阿保親王塚鏡: 筆者撮影(阿保山親王寺所蔵)

⑦掛迫鏡: 筆者撮影(広島県立歴史博物館所蔵)

図18 ④貝吹鏡: 筆者撮影(宮内庁書陵部所蔵)

⑤田邑2号鏡: 筆者撮影(山田邦和氏蔵)

⑥阿保親王塚鏡: 筆者撮影(阿保山親王寺所蔵)

⑦掛迫鏡: 筆者撮影(広島県立歴史博物館所蔵)

図19 ①円満寺山鏡: 筆者撮影(岐阜県博物館所蔵)

②宝塚鏡: 奈良県立橿原考古学研究所編2006

③伝洪谷鏡: 筆者撮影(京都国立博物館所蔵)

④貝吹鏡: 筆者撮影(宮内庁書陵部所蔵)

⑤田邑2号鏡: 筆者撮影(山田邦和氏蔵)

⑥阿保親王塚鏡: 筆者撮影(阿保山親王寺所蔵)

⑦掛迫鏡: 筆者撮影(広島県立歴史博物館所蔵)

M32: 筆者撮影(東京大学総合研究博物館所蔵)

図20 ①円満寺山鏡: 筆者撮影(岐阜県博物館所蔵)

②宝塚鏡: 奈良県立橿原考古学研究所編2006

③伝洪谷鏡: 筆者撮影(京都国立博物館所蔵)

④貝吹鏡(写真): 筆者撮影(宮内庁書陵部所蔵)

④貝吹鏡(断面図): 奈良県立橿原考古学研究所編2006

⑤田邑2号鏡: 筆者撮影(山田邦和氏蔵)

⑥阿保親王塚鏡: 加藤他2018

⑦掛迫鏡: 筆者撮影(広島県立歴史博物館所蔵)

図21 筆者撮影(宮内庁書陵部所蔵)

図22 M32: 筆者撮影(東京大学総合研究博物館所蔵)

⑤田邑2号鏡: 筆者撮影(山田邦和氏蔵)

⑥阿保親王塚鏡: 筆者撮影(阿保山親王寺所蔵)

⑦掛迫鏡: 筆者撮影(広島県立歴史博物館所蔵)

図23 M32: 筆者撮影(東京大学総合研究博物館所蔵)

④貝吹鏡: 筆者撮影(宮内庁書陵部所蔵)

⑤田邑2号鏡: 筆者撮影(山田邦和氏蔵)

⑥阿保親王塚鏡: 筆者撮影(阿保山親王寺所蔵)

⑦掛迫鏡: 筆者撮影(広島県立歴史博物館所蔵)

図24 筆者撮影(東京大学総合研究博物館所蔵)

図25・26 ④貝吹鏡: 筆者撮影(宮内庁書陵部所蔵)

⑤田邑2号鏡: 筆者撮影(山田邦和氏蔵)

⑥阿保親王塚鏡: 筆者撮影(阿保山親王寺所蔵)

⑦掛迫鏡: 筆者撮影(広島県立歴史博物館所蔵)

図27 筆者撮影(東京大学総合研究博物館所蔵)

図28 筆者撮影(東京大学総合研究博物館所蔵)

図29 田辺1962(筆者一部編集)

図30 後藤拓本・不在内区: 後藤1926(筆者加筆)

現存資料・M29接合: 筆者撮影(東京大学総合研究博物館所蔵)

図31 筆者撮影(天理大学考古学民俗学研究室所蔵)(筆者加筆)

図32 129鏡(城の山鏡): 筆者撮影(朝来市埋蔵文化財センター所蔵)

114鏡(真名井鏡): 水野編2017

鏡片②・③: 筆者撮影(天理大学考古学民俗学研究室所蔵)

図33 筆者撮影(東京大学総合研究博物館所蔵)

図34 蓮尺茶臼山鏡: 奈良県立橿原考古学研究所編2006

鈕片④: 筆者作成(東京大学総合研究博物館所蔵)

図35 ④貝吹鏡: 筆者撮影(宮内庁書陵部所蔵)

図36 城の山鏡: 筆者撮影(朝来市埋蔵文化財センター蔵)

図37 新山鏡（左）：奈良県立橿原考古学研究所編2006
真名井鏡（右）：水野編2017
図38 新山鏡（上）：奈良県立橿原考古学研究所編2006
真名井鏡（下）：水野編2017

鈕片[㊤]：筆者作成（東京大学総合研究博物館所蔵）
表1 藤丸2005（筆者一部修正）
表2～5 筆者作成

Rediscovery of a Fragment of Triangular-Rimmed Mirror Displaying Divinities and Animal Motifs from the Collection of The University Museum, University of Tokyo.

Kensho AMEMIYA

It has been known through the collection catalogue in 1989 that an unspecified fragment of inner district part of a triangular-rimmed mirror displaying divinities and animal motifs (TRM-DA) is stored at the University Museum, University of Tokyo (UMUT). For several decades, however, its whereabouts and details remained unknown. I rediscovered the specimen, named as “M32”, in 2019.

The M32 is a fragment of mirror classified as “the 134 type” of TRM-DA, and seven mirrors belonging to the same type have been known. By comparing the M32 mirror with the other 134 type mirrors in terms of the occurrence and expansion of the mold damages and alteration patterns, it seems that the M32 is the sixth mirror to be produced among the eight mirrors of same type.

The history before the rediscovery of M32 can be traced by examining various recordings such as notes and data cards housed at UMUT and Goto Shuichi’s rubbing collection stored at Tenri University. M32 had been stored at the Department of Anthropology, the University of Tokyo since before 1926. Although Goto had recognized M32 as a fragment of mirror excavated from Mannen-Yama Kofun, it was not published due to its small fragment size. In 1950, the fragment was firstly termed “M32” and was subjected to chemical composition analysis by Tanabe Giichi, who continued to possess it after his analysis. M32 was returned to UMUT in 1981, then it was published in the catalogue of 1989 as an inner distinct fragment of mirror. After that, its whereabouts had been missing until its rediscovery in 2019.

As other 3 mirror fragments in Goto’s rubbing collection are deemed as TRM-DM found in Mannen-Yama Kofun and it is speculated that one of those fragments belongs to the same individual of already-known mirror based on button fragment, the final count of mirrors from Mannen-Yama Kofun can be summarized as follows: 2 relief-carved beast belt mirrors, 9 TRM-DA, and 1 outer district fragment of TRM-DA (?), totaling 12 mirrors.